

徳田 真由美

Mayumi Tokuda

学部長 兼ヘルスケアシステム科学専攻長・教授
博士(看護学)

✉ mayumi.tokuda@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword

在宅看護学、地域看護学、高齢看護学、臨床看護学

プロフィール

2004年 千葉大学大学院 看護学研究科 博士後期課程 看護学専攻 修了

2000年 石川県立看護大学 看護学部 講師

2005年 石川県立看護大学 看護学部 准教授

2018年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 教授

研究分野

看護学 / 地域看護学 / 在宅看護

所属学協会

日本地域看護学会、日本在宅ケア学会、日本老年看護学会、日本看護科学学会、千葉看護学会、文化看護学会、日本うんこ文化学会

専門分野・研究分野

地域で暮らす病気や障害をもつ人とその家族の
QOLの向上をめざす支援方法を追究する

地域で暮らす、病気や障害をもつ人とその家族を支援する研究を行っている。特に、様々な問題を生じやすい排便に問題のある場合や、療養場所の移行などに焦点をあて、本人とその家族を対象として必要とされる看護援助について検討してきた。また、認知症やがんをもつ人への看護のあり方を検討してきた。

近年は特に、排便ケアに焦点をあて、排便に援助を必要とする在宅要介護者とその家族の状況、訪問看護師の排便援助の特徴、高齢者の排便の状況などを調査し、人にとっての排便の意味、価値観、影響などを明らかにし、多様なQOLの向上を目指した支援のあり方を追究している。

研究内容

排便ケアを必要とする人とその家族の状況と
よりよい支援を明らかにする研究

これまでの研究で以下のことが明らかになってきている。

1. 排便に援助を必要とする在宅要介護者は、便秘などの排便障害や、排便動作の困難が生じ、睡眠、外出等生活に支障が生じていた。家族介護者にとっては介護負担が大きく、入浴、睡眠、外出等の生活に支障が生じていた。
2. 訪問看護師は、本人・家族が継続可能で健康的な排泄習慣に変更する排便援助や、排便助助のできない家族介護者の場合には訪問時に便を出し切る援助をしていた。
3. 「便秘の改善ケアプロトコル」を作成し、対象の尊厳の保持と QOL の向上を目指すためのアセスメントについて記述した。
4. 便・尿とは、出すべき物である、健康状態がわかる、気分が爽快になる、衛生的に汚い、汚くない、人に見られたくない、神に感謝するという多様な意味があり、自分で排泄の調子を判断する目安をもちながら管理していた。

今後は、排便で困っている方や専門職の方とともに、排泄文化と対話を大切にした、わかりやすい地域包括的排便ケアツールを開発し、多くの方の快便をめざして取り組みたい。

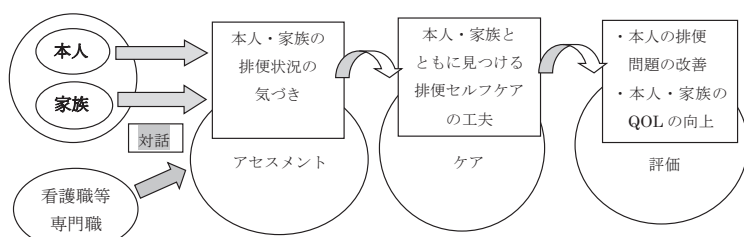


図. 排泄文化と対話からアプローチして快便をめざす地域包括的排便ケアツールの開発



その人らしく生きることを支える

シーズ・地域連携テーマ例

- 地域包括的排便ケアツールの開発
- 在宅サービス提供機関（訪問看護ステーション、通所サービス、ショートステイ等）における課題の改善

論文

- 沖縄に暮らす高齢者の排泄に関する意識調査、徳田真由美 他、石川看護雑誌、14、121-126、2017
- 高齢者訪問看護の質指標の開発 認知症ケアに関する質指標の構築と標準化、伴真由美 他、看護研究、40 (4)、73-84、2007
- 在宅要介護者の新たな排泄習慣の形成にかかわる看護援助、伴真由美 他、千葉看護学会会誌、12 (2)、36-42、2006
- 排便に援助を必要とする在宅要介護者とその家族の状況、伴真由美、千葉看護学会会誌、10 (2)、49-55、2004
- 病棟看護師長からみた退院調整の現状と課題、伴真由美 他、石川看護雑誌、2、33-41、2005

書籍等出版物

- 地域・在宅看護論Ⅰ総論、改訂第3版、南江堂、2024年
- 地域・在宅看護論Ⅱ支援論、改訂第3版、南江堂、2024年
- 高齢者の生活機能再獲得のためのケアプロトコル—連携と協働のために、日本看護協会出版会、2010年
- 最新 高齢者看護プラクティス 地域・在宅における高齢者への看護、中央法規出版、2005年

講演・口頭発表等

- A市生活者の排便状況の実態調査、日本うんこ文化学会第3回学術集会、2023年
- 大学生の排便状況に関する研究、日本地域看護学会第25回学術集会、2022年
- 人にとっての「うんこ」の意味とケア方法の決定、日本うんこ文化学会第1回学術集会、シンポジウム、抄録集、2021年

競争的資金等の研究課題

- 市民の快便をめざすための地域包括的排便ケアツールの開発：科学研究費補助金（基盤研究C）、2022-2024年度
- 高齢者の胃ろう閉鎖、膀胱留置カテーテル抜去を安全かつ効果的に実施するためのアセスメント・ケアプログラムの開発に関する調査研究事業、厚生労働省：老人保健事業推進費等補助金、2007-2008年度

社会貢献活動

- 小松市介護保険事業計画等策定委員会（2023年度－）
- 日本うんこ文化学会副代表（2021年度－）
- 小松市コンネクスクエア検討委員会（2018年度－）
- 健康づくり推進協議会委員（かほく市、津幡町）（2006-2008年度）
- 訪問看護ステーション運営委員（宇ノ気、かほく高松）（2002-2009年度）

彦 聖美 学科長・教授
博士(看護学)

Kiyomi Hiko

✉ kiyomi.hiko@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword在宅看護学、男性介護者、多胎児家庭、エンドオブライフケア、
死生観

プロフィール

2010年 石川県立看護大学大学院 博士後期課程実践看護学領域Ⅳ(コミュニティ) 修了
 2008年 石川県立看護大学 看護学部 在宅看護学 助手
 2010年 石川県立看護大学 看護学部 在宅看護学 講師
 2013年 石川県立看護大学 看護学部 在宅看護学 准教授
 2016年 金城大学 看護学部 看護学科 教授
 2024年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 教授

研究分野

地域・在宅看護学 / エンドオブライフケア

所属学協会

日本公衆衛生学会、日本疫学会、北陸公衆衛生学会、日本健康学会、日本在宅ケア学会、
 日本エンドオブライフケア学会、日本糖尿病教育・看護学会、日本ホスピス・在宅ケア研究会、
 日本ルーラル看護学会、日本災害看護学会、日本小児保健協会、石川県小児保健学会、
 International Family Nursing Association

専門分野・研究分野

当事者支援と研究を両立するモデルの構築

男性介護者支援・多胎児家庭支援の研究では、地域看護学・公衆衛生学をベースに、根拠に基づいた支援の実践と評価を目的とした地域参加型実践研究:Community-Based Participatory Research (CBPR) に取り組んでいる。「男性介護者」や「多胎児家庭」を課題の多い集団として焦点化し、実態把握調査と当事者との協働を通して真のニーズを把握し、介護や育児の破綻などのリスクを未然に防ぐことを目指す。さらに、死生観研究・エンドオブライフケア研究で、一人一人が望むような人生の最期の実現に向けた分野横断的・領域横断的なエンドオブライフケアモデルの構築を目指している。

研究内容

課題が多い人・集団に対する支援のユニバーサルデザインを目指す

1. 男性介護者研究と支援

男性介護者は、日本文化に根強い性別役割意識を背景に、孤立しやすいため、健康や生活がいきなり破綻するリスクが高い。困難が多い男性介護者に対する支援の充実は、介護者支援のバリアフリー(マイナスをゼロにする支援)からユニバーサルデザイン(ゼロからプラスにする支援)を目指すことになり、結果的に、女性も含めた家族介護者全体の支援に寄与する。

2. 多胎児家庭研究と支援

多胎児家庭は、健康課題や生活課題が単胎児家庭よりも格段に多く、予防的に困難を減らす支援を充実することは、多様な課題やニーズに先んじて対応する。2016年から「ふたご手帖プロジェクト」で、妊娠が分かった時から出産、育児まで、必要な情報や支援を網羅した「ふたご手帖」を作成し、全国普及活動を展開している。

3. 死生観・エンドオブライフケア研究と支援

一人一人が人間として、自分自身の暮らしの在り方を見つめ、やがて来る死までをどう生きるかについて考える機会や場を創り、集い、ともに語り合っていくエンドオブライフケアの研究と実践を推進する。

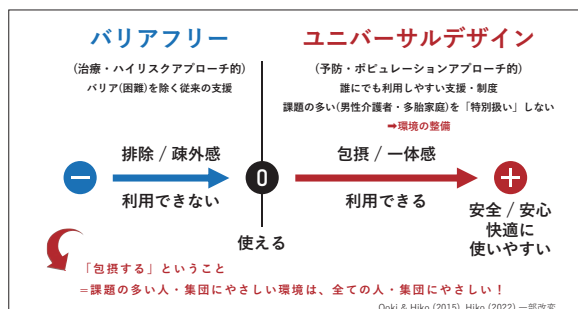
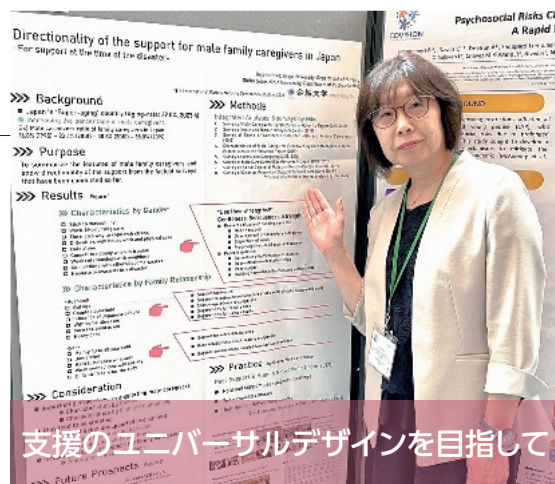


図1. 支援のユニバーサルデザイン



シーズ・地域連携テーマ例

- 男性介護者研究と支援
- 多胎児家庭研究と支援
- エンドオブライフケア研究と意思決定支援

受賞

- 2022年6月 小児保健協会 2021年度小児保健協会最優秀論文賞受賞

論文

- 8都道県の男性介護者実態調査, 彦 聖美, 日本健康学会誌, 88 (2), 68-79, 2022
- 認知症家族への支援—介護者支援のユニバーサルデザインを目指して—, Yamanashi Nursing Journal, 21 (1), 1-6, 2022
- 乳幼児期双生児の発育曲線と運動発達, 小児保健研究, 80 (3), 404-411, 2021
- 北陸3県の介護支援専門員が捉える男性介護者の特徴, 日本在宅ケア学会誌, 22 (2), 56-63, 2019
- ドイツの高齢者医療・介護における事前医療指示書, ホスピスケアと在宅ケア, 23 (1), 26-33, 2015

書籍等出版物

- 看護学テキストNiCe、地域・在宅看護論Ⅱ, 南江堂, 2024.1
- 新 現場で役立つラクラク成長曲線, 診断と治療社, 2023.8
- Contributions to the Local Community Through the University: Chapter2 Community health and longevity project, Intech Open, 2022.3
- よくわかる看護研究の進め方・まとめ方 第3版, 医歯薬出版株式会社, 2017.4
- Public Health-Social and Behavioral Health: Strategy and Practice of Support for Families with Multiple Births Children, Intech Open, 2012.5

講演・口頭発表等

- 男性介護者世帯に対する防災対策支援の実態調査 (第三報), 第82回日本公衆衛生学会総会, 2023.11.11
- Directionality of the support for male family caregivers in Japan- For support at the time of the disaster, 16th International Family Nursing Conference, 2023.6.21
- 学会特別講演: 認知症家族への支援—介護者支援のユニバーサルデザインを目指して, 第21回山梨大学看護学会学術集会, 2021.11.6

競争的資金等の研究課題

- 認知症高齢者を介護する男性の統制別特徴を踏まえたエンドオブライフケアモデルの構築, 文部科学省科学研究費補助金基盤 (C), 研究代表者, 2024-2027
- 高齢期の妻や親を介護する男性介護者世帯に対する災害時の健康管理と共助に関する研究, 文部省科学研究費補助金基盤研究 (C), 研究代表者, 2019-2023

社会貢献活動

- 男性介護者と支援者の全国ネットワーク (男性介護ネット) 北陸ブロック世話人 (2019~)
- 日本エンドオブライフケア学会理事 (2018~)

高木 祐介 学長補佐(研究担当)・教授

博士(健康科学)、公認心理師

Yusuke Takagi

✉ yusuke.takagi@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

運動、作業、食事 / 喘息、熱中症、低体温症、生活習慣病、自覚症状 / 暑熱、積雪、高地、水中

プロフィール

2008年 東京学芸大学 教育学部 生涯学習課程 生涯スポーツ専攻 卒業
2010年 広島大学大学院 保健学研究科 博士課程前期 保健学専攻 修了
2012年 日本学術振興会 特別研究員DC2
2013年 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 博士課程 修了
2023年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 教授
2024年 同大学 学長補佐

研究分野

運動生理、環境生理、健康心理、犯罪心理、スポーツ栄養、栄養教育

所属学協会

日本体力医学会、日本衛生学会、日本生理人類学会、日本健康心理学会、日本ウォーキング学会、日本登山医学会

専門分野・研究分野

気象・環境の変化は、みんな同じように感じるわけではないし、同様に適応できるわけでもない。

とても暑い日に冷房がよく効いた部屋に入った際、「涼しい！気持ちいい！」と感じる人がいれば、「寒い・・・お腹痛くなりそう・・・」と感じる人もいます。また、雨や雪等によって起きやすい症状がありますし、高地や水中等の滞在時に日常生活では経験しないような体の反応を知ることもあります。私たちの心と体でみられる感じ方や反応等の違いは、本当に「人それぞれ」。気象・環境条件の変化だけでなく、その人の体調・生活習慣・食事・水分摂取頻度・睡眠・既往歴・性格特性・服装等、あるいは、そういったことに影響を及ぼす過ごし方や働き方、休み方、身近にいる動植物、社会情勢の変化等、多種多様な要因が関係しています。それらの関係性は、健康管理や健康寿命の延伸、快適な暮らし等を行っていく上で、知っておきたい情報です。ですが、明らかになっていないことは多々あり、数多くの研究者たちがその解明に挑んでいます。その中でも、私は実際の現場(生活、運動・スポーツ、学校、産業、移動、等)の実態を測定・評価する研究者です。

研究内容

気象・環境、食事・栄養、既往歴、性格特性がヒトの身体活動時の体調や健康状態等に及ぼす影響を隈なく探る！

私たちは、学校の体育や部活動、スポーツや実生活等の現場で運動する際、もっている力を発揮し、心地よい気持ちや達成感、形態的・機能的な改善、あるいは、よい成果等を得たいと考えます。ですが、体調・健康状態を整えていなければ、運動中のパフォーマンスが低下したり、自覚症状を呈したり、疾患が生じることもあり得ます。私たちの研究チームでは、特に、そのような課題に対して科学的な知見に基づく指導案を提供するため、種々の気象・環境条件下の運動時における望ましい体調管理・健康管理について、多くの調査・実験によって得られたデータから、議論・考察し、情報発信しています。

私たちのこれまでの研究内容は、「種々の気象・環境下における望ましい喘息コントロール方法の探索」、「気象・環境条件の変化と体温管理の検討」、「朝食摂取の有無による午前中の意欲・活力・自覚症状の変化に関する実態調査」、「部活動後の食欲と間食」、「除雪作業時の健康管理」等です。



写真① ショベル除雪作業時の生理学的指標(心拍数・血圧・直腸温・鼓膜温)を評価



写真② 伊吹山頂上到着時の肺機能検査。指標変化の影響因子は気圧？運動？既往歴？



写真③ 暑熱環境下のスポーツ観戦時の感覚指標を測定



喘息の子どもにもよい運動と環境を考え中

シーズ・地域連携テーマ例

- 喘息、食物アレルギーと運動に関すること
- 暑熱環境や寒冷環境等の活動時の安全管理
- 健康相談 (特に、食生活や身体活動 等)

論文

- Takagi Y., et al.: The Influence of with and without Water Intake on the Physiological Response, Dehydration Rate and Urinary Specific Gravity during the Simulation of Physical Education Class in Summer. School Health, in press.
- Takagi Y., et al.: Changes in urinary catecholamine, heart rate, blood pressure and double product during ascent of one-day Mt. Fuji hiking in Japanese young males. The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, 9(3): 143-148, 2020.
- Takagi Y., et al.: Changes in Pulmonary Functions in Individuals with or without Past Medical Histories of Bronchial Asthma during Physical Education Classes in Summer and Winter. International Journal of Sports and Health Science, 16: 107-111, 2018.
- 高木祐介 他：喘息体質を有する若年男性の短距離全力泳後における頸部位浸水休息が肺機能に及ぼす影響。体力科学, 66 (4) : 245-253, 2017.
- 高木祐介 他：若年成人男性のショベル除雪作業時における深部体温の変化ー 中国地方の豪雪地帯にて行った実践的研究ー。日本衛生学雑誌, 66 (4) : 704-710, 2011.

筆頭著者として計48編執筆

競争的資金等の研究課題

- 「喘息体質を有する者の運動時の呼吸機能に影響を及ぼす種々の環境因子に関する研究」科学研究費補助金(特別研究員奨励費)、平成24年4月～平成25年3月
- 「Buffer room入室の有無が喘息体質者の運動時の呼吸機能に及ぼす影響」科学研究費補助金(研究活動スタート支援)、平成25年4月～平成27年3月
- 「季節と地理的環境の違いが喘息体質者の屋外運動時における呼吸機能変化に及ぼす影響」科学研究費基金(若手研究B)、平成27年4月～平成30年3月
- 「季節変化に伴う大気汚染物質濃度と気象条件が喘息体質者の運動後の肺機能に及ぼす影響」科学研究費基金(若手研究)、平成30年4月～令和3年3月
- 「環境関連因子(季節、地域、大気、適応能)が喘息体質者の運動時の肺機能に及ぼす影響」科学研究費基金(基盤研究C:研究代表者)、令和3年4月～令和7年3月
- 「喘息体質者の体育実技・課外活動の運動時肺機能に影響を及ぼす環境因子と心理的因子」科学研究費基金(基盤研究C:研究代表者)、令和7年4月～令和11年3月

伊藤 道子 教授 博士(看護学)

Michiko Ito

✉ michiko.ito@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

医療関連感染、感染対策、看護ケア、病院管理

プロフィール

2007年 千葉大学大学院看護学研究科後期博士課程 修了
2009年 北里大学看護学部看護学科 准教授
2009年 北里大学看護キャリア開発・研究センター認定看護師教育課程 感染管理 教員(兼務)
2023年 公立大学法人公立小松大学保健医療学部看護学科 教授

研究分野

感染看護学、感染管理、感染制御、医療安全、基礎看護学

所属学会

日本環境感染学会、日本防菌防黴学会、日本看護科学学会、神奈川県感染症医学会

医療分野で起こる感染症を、
看護実践で最小限にしたい

専門分野・研究分野

看護職者の感染予防対策の取り組みに関する研究

看護ケアの三要素は、患者の「安全を守ること」「安楽をはかること」「自立を促すこと」である。そこで看護職者は、看護ケアの三要素が常に満たされるよう、看護実践をすることが求められる。しかしながら、時に患者の安全を守ることができない状況が起こる。その一つが、医療関連感染である。これは、医療をうけている人があらたな感染症を発症することである。そこでもし医療関連感染が起ると、患者の安全を守ることが未達成になっていることになる。それに加え、患者は安楽にもならず、自立も遅延する。その結果、看護ケアの三要素全てが満たされないことになる。そこで看護実践時は、常に医療関連感染防止をすることが求められる。

ほとんどの病原体は接触することで伝播していく。その一方看護ケアは、患者へ接触しないと成り立たない。加えて看護実践時は、点滴や注射針などの滅菌されている物品と、排泄物や血液など感染源と考えられている物質を、短時間で処理・処分することもある。そこで看護職者は、使用する物品や自らの手指が清潔なのかどうかを瞬時に判断し、常に清潔を保つ必要がある。しかしながら、高度な医療が求められている昨今は、短時間で複雑な看護実践が求められる。そのため、患者に接触する物質を常に清潔に使用していくことは、高度な課題である。

研究内容

看護職者が使用・管理する物品の感染予防の観点での検討

1. 医療用テープ

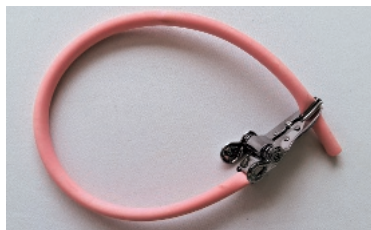
未滅菌の医療用テープは洗浄されたり消毒されたりすることは滅多にない。そこで、細菌汚染と管理状況の関連について検討した。6病院から提供された88巻の医療用テープを検討すると、テープの使用量が増えるほど検出される細菌総数が多くなる傾向が明らかになった。

2. 駆血帯

駆血帯の細菌汚染とその管理状況との関連性を検討した。日本の8つの病院の看護師から186本の駆血帯を収集した。管理状況は質問紙調査で実施した。定期的に消毒された止血帯からはほとんど細菌は検出されなかった。しかし、消毒されていない止血帯からは、ブドウ球菌、バチルス属、コリネバクテリウム属が検出された。また、汚染された止血帯を介して細菌が伝播することも実験的に確認した。



医療用テープ



駆血帯

シーズ・地域連携テーマ別

- 看護師が実践する感染対策
- 医療施設で使用する物品の清潔保持の評価

論文

- 新型コロナウイルスパンデミック期における感染管理と看護、伊藤道子、林俊治、日本防菌防黴学会誌48(9)、P.481-486、2020年9月

書籍等出版物

- 内藤俊夫、伊藤道子、林俊治他；新体系看護学全書 成人看護学⑨感染症／アレルギー・免疫／膠原病 第5版、メディカルフレンド社、2023。

講演・口頭発表等

- Bacterial transmission via medical adhesive tape used by nurses, Michiko Ito, Daisuke Araki, Kazuko Ishii, Noriko Ikeda, Nobuko Fukahori, Kumiko Morioka, Rie Suzuki and Shunji Hayashi, 9th International Asia Pacific Society of Infection Control (APSIC 2019), Vietnam, Da Nang city., 2019年3月
- Bacterial transmission via phlebotomy tourniquets, Michiko Ito, Rie Suzuki, Kazuko Ishii, Noriko Ikeda, Akane Ninomiya, Yoriko Ueno, Yuko Umemura, Akie Shimada, Mami Sanada and Shunji Hayashi, The 17th East Asian Conference on Infection Control and Prevention (EACIC 2020), Japan, Kanagawa prefecture, Yokohama city., 2020年2月
- 母子保健事業で実施されたCOVID-19に対する感染対策のプロセス、伊藤道子、和智志げみ、新井陽子、第42回日本看護科学学会学術集会、2022年12月
- Michiko Ito, Akane Ninomiya, Kazuko Ishii, Mami Sanada, Akie Shimada, Noriko Ohno, Atsuhiko Kanayama, Shunji Hayashi: Bacterial contamination of holder bags to carry antiseptic hand rub bottles, The 19th Asia Pacific Society of Clinical Microbiology and Infection (APCCMI 2023) ABSTRACT BOOK, 225, 2023.

競争的資金等の研究課題

- 「フリーニング店に持ち込まれる衣類の微生物汚染に起因する感染事故リスクとその防止法の検討」厚生労働科学研究費補助金、健康安全確保総合研究分野 健康安全・危機管理対策総合研究2020-2022
- 「看護職者が管理・使用する物品を介した医療関連感染のリスクの検討」日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 (C) 2020-2023
- 「フリーニング業の新業務形態の衛生学的安全性の検討および効果的な衛生 管理手法の確立」厚生労働科学研究費補助金、健康安全・危機管理対策総合事業2022-2023

社会貢献活動

- 千葉看護学会査読委員
- 神奈川県感染症医学会評議委員
- 特定行為研修管理委員会委員 (加賀市医療センター)

上田 映美

准教授
博士(保健学)

Terumi Ueda

✉ terumi.ueda@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

看護技術、がん看護学、老年看護学

プロフィール

2007年 金沢大学附属病院 看護部
2014年 金沢大学 医薬保健研究域 保健学系 研究員
2016年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 博士後期課程 修了
2018年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

研究分野

看護学 / 臨床看護学

所属学協会

看護理工学会、看護実践学会、日本看護科学学会、日本創傷治療学会、日本褥瘡学会、
国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会、日本創傷・オストミー・失禁管理学会

専門分野・研究分野

足のむくみに対するケアは、 面倒でお金がかかり放置されることが多かった

足のむくみは、様々な原因により発生する。看護分野では、がんの手術等により発生するリンパ浮腫や、高齢者が車椅子等で長時間座ったままの姿勢をとることにより発生する浮腫などが、その人の生活に支障を与える理由から問題視されている。しかし、むくみの研究は生命に直接影響を与えないことから、ほとんど進んでいないのが現状である。新しい足のむくみのケア方法を開発し、「どうせ治らない」とケアすることを諦めていた人々を救うことを目的として、研究に取り組んでいる。

研究内容

高齢者の足のむくみ(下腿浮腫)を軽減する圧迫商品の開発

施設で生活する高齢者は、寝たきりを予防するために長時間座って生活することが多い。足を下垂しているため、重力の影響で下腿に水分が貯留し、浮腫が発生する。写真は浮腫が発生した高齢者の下腿であり、足の甲が腫れて靴が履けなくなっている(図1)。

下腿浮腫に対しては、圧力の強い靴下やストッキングを履く圧迫療法が有効であるが、高齢者施設ではほとんど実施されていない。現在取り組んでいる研究は、高齢者施設で、圧迫療法が行われない理由や施設側の圧迫商品に対するニーズを調査し、それらの施設でも簡便に利用できる圧迫商品を開発することである。その他にも、看護の分野を超えて、理工学分野と連携しながら新しい下腿浮腫の評価方法を開発したり、圧迫以外の新たな浮腫軽減方法を開発したりすることに挑戦している。



図1



足のむくみに苦しむ
多くの人たちを救いたい!

シーズ・地域連携テーマ例

- 下腿浮腫に対する圧迫商品の開発、実証実験
- 下腿浮腫の評価ができる機器の開発

受賞

- 国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会 功労賞 (2020年)
- 「リンパ浮腫管理の研究と実践」2024年度優秀論文賞 (2024年)

論文

- 健康女性におけるセラミックボールを用いた足温機器の下腿静脈還流促進効果と安全性の検証, 上田映美他, リンパ浮腫管理の研究と実践, 10(1), 1-7, 2022年4月
- Effects of vibration on chronic leg edema in chair-bound older adults: A pilot trial, Ueda T et al, Lymphedema Research and Practice, 9(1), 14-24, 2022年1月
- Objective assessment of leg edema using ultrasonography with a gel pad, Iuchi T et al, PLOS One, 12(8) e0182042, 2017年8月

書籍等出版物

- リンパ浮腫における弾性ストッキング (翻訳) 井内映美 他 MEP Ltd 2013年9月
- リンパ浮腫診断治療指針 井内映美 他 株式会社メディカルトリビューン 2013年9月

講演・口頭発表等

- 足背部浮腫に対する最適な圧迫圧の検討—健康女性による症例研究—, 上田映美, 第52回創傷治療学会, 2022年11月

競争的資金等の研究課題

- 履くだけで足背部浮腫を改善する介護負担に配慮した室内靴の開発, 日本学術振興会, 科学研究費助成事業 若手研究, 2020年4月—2023年3月
- 近赤外光法で足背部浮腫の間質液量を評価する新しい機器の開発, テルモ生命科学復興財団 研究助成 看護研究, 2022年
- 高齢者が自力で履くことができ下腿浮腫軽減効果のある弾性ストッキング圧の検証, 日本学術振興会, 科学研究費助成事業 基盤研究 (B), 2024年4月—

社会貢献活動

- 日本褥瘡学会・日本褥瘡学会教育委員会ガイドライン策定作業部会 (2018年7月—)
- 国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会・論文賞選考委員会 (2019年4月—)
- 日本看護科学学会・日本科学学会和文誌専任査読委員 (2019年9月—)

加藤 千夏 講師
博士(保健学)

Chinatsu Kato

✉ chinatsu.kato@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword

看護技術、臨床看護、睡眠障害

プロフィール

1992年 社団法人石川勤労者医療協会 城北病院 看護師
 2000年 財団法人筑波薊仁会 筑波学園病院 看護師
 2003年 医療法人社団勝木会 やわたメディカルセンター 看護師
 2013年 金沢大学大学院 医学系研究科 博士前期課程 修了
 2018年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教
 2020年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 博士後期課程 修了

研究分野

慢性疾患看護

所属学会

看護実践学会、日本看護研究学会、日本看護科学学会、日本睡眠学会、日本遠隔医療学会、
 日本糖尿病医療学会

専門分野・研究分野

睡眠と健康

私は、看護師として20年以上夜勤のある生活を送ってきましたが、いかに良質な睡眠を手に入れるかが毎日の課題でした。「睡眠負債」が心身の健康をおびやかすということから、近年、急速に睡眠研究が進み、快眠を手に入れるための寝具の開発や照明などの寝室環境の改善、仮眠の取り方の工夫などさまざまなアプローチがなされています。しかし、いまだ、夜勤といったシフトワークによる睡眠障害・健康被害を克服する科学的な解決策は見出されていません。現代社会から夜勤をなくすことは不可能であり、交代勤務者の健康被害を最小限になるような取り組みが必要です。夜勤の多い看護師という職種ではありますが、睡眠に関連する看護のエビデンスは多くありません。そのため、睡眠に関する根拠ある看護ケアの提供やエビデンスづくりをしていきたいと考えています。

研究内容

睡眠時無呼吸症候群

さまざまな睡眠障害のなかでも「睡眠時無呼吸症候群」に着目しています。寝ている時に大きないびきをかき、ときどき10秒以上呼吸が止まっているようなら「睡眠時無呼吸症候群」かもしれません。寝ているときに何度も息が止まる睡眠時無呼吸とは、夜中に何度も素潜りをしていることと同じ状態です。そのため、眠っているつもりでも身体は全く休めておらず、起床時の頭痛や日中の居眠り、倦怠感につながります。また、夜中の低酸素の繰り返し、酸化ストレス、炎症、交感神経系の経路を賦活化し、高血圧や動脈硬化を促進させ、心筋虚血などを含む脳心血管系疾患の発症にも影響するといわれています。

CPAP (持続陽圧呼吸) 療法

寝ている時に呼吸が止まってしまう原因は、首周りに脂肪がついて気道がふさがってしまうためです。日本人はアジア人特有の顎顔面形態のため、わずかな体重増加でも容易に気道がふさがりやすいと言われています。この空気の通り道である気道がふさがらないようにするのがCPAPという器械です。寝るときに鼻から空気を送り続けるものです。CPAPは根治治療ではなく、あくまでも対症療法であり、毎晩、鼻マスクを装着して眠る必要があります。

このCPAPという器械は現在、急速な進化を遂げ、CPAPを取り巻く環境も劇的に変化しています。具体的には、従来の対面診療から遠隔医療への移行です。CPAPに遠隔装置が搭載され、ICTを駆使した遠隔医療が始まりました。これからの新しい医療のあり方として、患者自身が睡眠のセルフマネジメント能力を高める必要があると考えます。そのためのセルフケアプログラムの開発を行い、検証を重ね、エビデンスに基づいた看護ケアの確立を目指します。

睡眠について



シーズ・地域連携テーマ例

- 無呼吸を防止する横向き寝まくら等の寝具の研究
- 睡眠環境（照明）に関する研究
- CPAPの遠隔医療に関する研究

論文

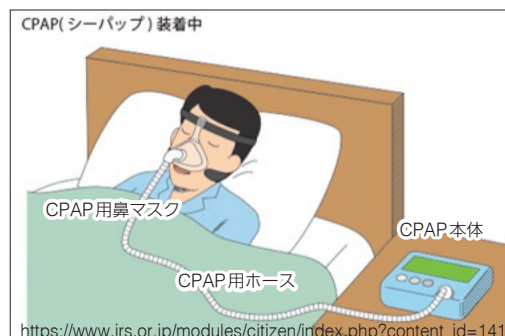
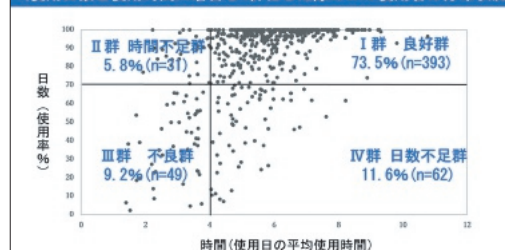
- Classification of adherence of CPAP users: a four-group comparison based on utilization rate and mean usage time on usage days. Kato C et al., Journal of Wellness and Health Care, 43 (2) 11-22, 2020
- 非肥満の睡眠時無呼吸症候群患者における持続気道陽圧 (CPAP) 療法の導入から継続に至るプロセス、加藤千夏他、看護実践学会, 32 (2), 2020

講演・口頭発表等

- Effect of color and intensity tunable LED lighting in the postoperative recovery phase of total knee arthroplasty (TKA) 第36回日本看護科学学会学術集会 2016年12月
- 「待ってほしい患者」と「いつまでも待ってられない看護師」 第2回糖尿病医療学会研究会, 2015年10月

競争的資金等の研究課題

- 睡眠時無呼吸症候群のCPAP中断をなくす～アセスメントツール開発とその妥当性～ (研究活動スタート支援2018-2019年)
- Prochaska変容ステージモデルによるCPAPセルフケアプログラムの開発 (若手研究2021-2024)
- 睡眠時無呼吸を伴う心不全患者の持続陽圧呼吸療法のフォローアッププログラムの開発 (若手研究2025-2027)

CPAPのアドヒアランスの4群化
(使用日数と使用時間に着目し4群化した際のCPAP使用者の分布状況)

清水 由加里

講師
博士(医学)

Yukari Shimizu

✉ yukari.shimizu@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

看護師、メンタルヘルス、離職率、
PNSにおける教育、乳幼児の曝露

プロフィール

2007年 福井大学大学院 医学系研究科 修士課程 修了
2018年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 講師
2019年 金沢大学医薬保健学総合研究科医学博士課程 修了

研究分野

健康・メンタルヘルス、新人看護師/教育プログラム・離職、乳幼児/
アレルギー・ADHD、個人の予防プログラム

所属学協会

日本衛生学会、日本体力栄養学会、日本看護管理学会、日本看護研究学会、日本災害看護学会、
日本死の臨床研究会、日本救急看護学会、北陸公衆衛生学会、日本看護協会

専門分野・研究分野

子どものアレルギー性疾患やこころの問題には 日用品との関連抜きには考えられない？！

近年、増加傾向にあるアレルギー性疾患や注意欠陥・多動性障害(Attention deficit hyperactivity disorder, ADHD)などの発達障害の原因には、乳幼児期に曝露される環境中の化学物質の存在が指摘されるようになってきている。

乳幼児および小児に対して、化学物質等の使用実態を調査し、さらに尿中パラベン、トリクロサン濃度を測定することによって曝露評価をする一方、住民疫学および臨床疫学を通して、気管支喘息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、鼻アレルギーのアレルギー症およびADHDを評価することに取り組んでいる。

研究内容

乳幼児期に曝露される環境中の化学物質

「乳幼児のアレルギー症に対するパラベン・トリクロサン等の抗菌性物質の曝露・影響評価」

4か月児半健診、1歳6か月児健診、3歳児健診の場でパラベン・トリクロサン等の抗菌性物質の曝露の評価に関しては、採尿調査を実施している。排尿が自立できない児においては、採尿用ポリエチレン製パックを用い、自立できる児では、通常の排尿コップを用いて採尿している。

質問紙では、日用品の使用状況や使用頻度などの調査や食事に関する調査、自閉傾向に関する調査し、化学物質との関連性について分析を行っている。

調査結果では、尿中パラベンの高濃度の児では、アトピー性皮膚炎の有病率が有意に高くパラベン類の使用とアトピー性皮膚炎との因果関係が疑われた。

今後も追跡研究を行い、健康教育に寄与していきたい。



生まれる前の胎児期から
安全な生活環境で、
健康的な日常を！

シーズ・地域連携テーマ例

- 新人看護師の教育プログラム
- メンタルヘルス支援とストレス測定
- パートナースhipナースingシステム(PNS)における教育プログラムの構築

受賞

- 国立大学法人福井大学 病院功労賞「新人看護師看護総合力育成プログラムの功績について」(2015年6月)

論文

- Current Status of Phlebotomy Training among Novice Nurses in Japan: A Survey Analysis Yukari Shimizu, Etsuko Matsumura, Sachiko Tachibana Cureus 14(8) 2022年9月
- Relationship between the Use of Parabens and Allergic Diseases in Japanese Adults — A Cross-Sectional Study Multidisciplinary Scientific Journal J 2018, 1 (1), 148-158 Yukari Shimizu et al.
- 福井大学医学部附属病院で開発されたPNSの効果—導入1年後の病棟看護師の認識—, 松村愛都, 橘幸子, 清水由加里, 上野栄一, 福井大学医学部研究雑誌, 第16巻1号, 37-46, 2016

書籍等出版物

- 新看護方式PNSによる教育・定着&ケアの質向上 PNSが変える新人看護職員教育! 高め共に育つ仕組みづくりと支援策看護部長通信2016年8.9月号 日総研
- ステップアップ編 新看護方式 PNS実践ガイド “実践ガイド&導入病院事例集 パートナースhipナースingシステムの実践に関する詳細なガイド 編者: 福井大学医学部附属病院看護部 PNSにおける新人教育の実際と効果的研修のコツp40-50 2015年4月 日総研出版

講演・口頭発表等

- 看護教育プログラムに関する研究の特徴—テキストマイニングの研究から— 藤本ひとみ 清水由加里 上野栄一 第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方学術集会 2019年03月
- 第45回日本看護研究学会学術集会 座長(口演)
- Nurturing NOVICE Nurses with The Partnership Nursing System (PNS): Changes in Nursing Skill Mastery Before And After Introduction Of PNS 2015. Yukari Shimizu Sachiko Tachiba Etsuko Matsumura ACENDIO. Swiss 2015年4月

社会貢献活動

- 福井県看護協会 (新人看護教育充実事業) 講師 (2019年~2024年)
- 石川県看護協会 新人看護職員研修着業教育担当者研修講師 (2016-2019)

鈴木 由依子 助教
博士(保健学)

Yuiko Suzuki

✉ yuiko.suzuki@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword

看護技術、リンパ浮腫

プロフィール

2014年 名古屋大学大学院 医学系研究科 博士課程前期課程 修了
 2015年 こまつ看護学校 専任教員
 2020年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教
 2022年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 博士後期課程 修了

研究分野

看護学

所属学協会

看護実践学会、日本看護研究学会、日本看護技術学会、コ・メディカル形態機能学会、
 国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン協議会、日本看護科学学会、看護理工学会

専門分野・研究分野

リンパ浮腫のセルフケアは患者の負担が大きい

乳がん術後リンパ浮腫は、乳がん術後に生じる二次性のリンパ浮腫で、罹患者の生活に大きな影響を与える疾患です。乳がん患者の増加と共に、その数は増加してきているといわれています。リンパ浮腫治療には複合理学療法が用いられますが、浮腫の悪化を防ぐため、また治療効果の維持のために、患者にはさらに自宅でのリンパ浮腫管理が求められています。しかし、乳がん治療とリンパ浮腫管理を同時に行わなければならない患者の負担は大きく、実際に患者からもセルフケアの大変さを聞いています。そこで、継続できるセルフケアを考えていくことを目的に研究に取り組みたいと考えています。

研究内容

リンパ浮腫のセルフケアを確立するための基礎研究

これまでの研究では、MR装置を用いて上肢リンパ浮腫患者における患肢の水分分布を調査しました。その結果、上肢リンパ浮腫の水分分布は前腕尺側に偏りがあり、その部位に焦点を当てたケア（リンパドレナージなど）を考えられる可能性が示唆されました。現在は、ケア時間を短縮し、患者が継続できるセルフケアを目指して、動物を用いたリンパ浮腫の基礎研究に取り組んでいます。ラットでは、リンパ節郭清等によりリンパ流が阻害されると余剰リンパを逃がすための迂回路が生じます。このことに焦点を当て、患者が自分自身で行うリンパマッサージの方法を確立できないかを考えています。



図1. リンパ浮腫のセルフケア



シーズ・地域連携テーマ例

- リンパ浮腫のセルフケアに関する研究

論文

- Comparison of normal hindlimb lymphatic systems in rats with detours present after lymphatic flow blockage, Suzuki Y et al., PLOS One, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0260404>, 2021
- 看護専門学校における入学後間もない学生が教員へ発信する情報—学生支援ツールに書かれた内容より—, 鈴木由依子他, 看護実践学会誌, 33 (3), 43-49, 2021
- 上肢リンパ浮腫における水分の分布—MR画像を用いて—, 鈴木由依子他, 形態・機能, 16 (2), 83-89, 2018

講演・口頭発表等

- 正常ラットの後肢リンパ系とリンパ流遮断後の迂回路との比較, 第52回日本創傷治療学会, 2022年11月
- Identification of the normal hindlimb lymphatic system in rats, 9th APETNA and 30th JWCOM, 2021
- 学生支援ツール「自己コンディション表」の効果—自己コンディション表の内容分析から—, 日本科学学会第39回学術集会, 2019年11月
- 巻尺で測定した周囲径と自覚症状はリンパ浮腫の指標として使えるか, 第13回日本看護技術学会学術集会, 2014年11月
- 上肢リンパ浮腫における水分の分布—MR画像を用いて—, 第40回日本看護研究学会学術集会, 2014年8月

競争的資金等の研究課題

- 新しいリンパ浮腫開発のためのリンパ流遮断後の迂回路形成過程の解明：科学研究費補助金（基盤研究C）, 2022-2024
- 郭清によるリンパ経路の変化に着目した組織学的根拠に基づくリンパドレナージ法の開発：科学研究費補助金（研究活動スタート支援）, 2020-2022

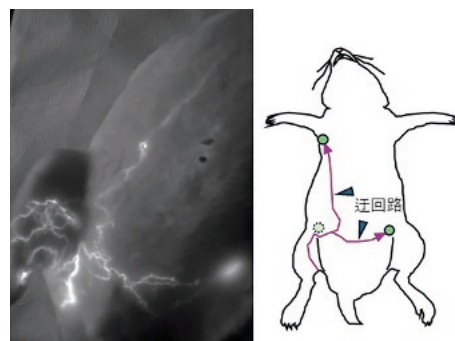


図2. リンパ節郭清後のラットのリンパ流（迂回路形成の例）

片山 美穂 教授
博士(保健学)

Miho Katayama

✉ miho.katayama@komatsu-u.ac.jp

研究
Keywordストレングスを活用した支援 育児中の母親の支援 母親のメンタルヘルス
ストレングスモデル 精神保健看護教育 看護実習

プロフィール

2018年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士後期課程 修了
 2020年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教
 2021年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 講師
 2023年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 准教授
 2025年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 教授

研究分野

精神保健看護学

所属学会

日本看護科学学会、日本精神保健看護学会、日本看護研究学会、日本うつ病学会、
 日本周産期メンタルヘルス学会、日本精神障害者リハビリテーション学会、日本看護学教育学会、
 看護実践学会

専門分野・研究分野

生きにくさを変えるストレングス。

視点を変えると支援が変わる

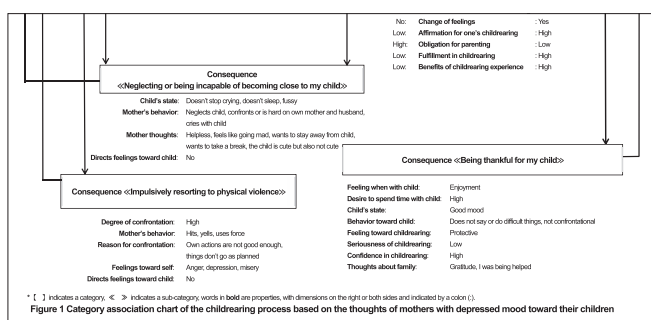
支援アプローチには、その人の「問題」に注目し、改善・解決していく方法があります。しかし、支援を受ける側は問題を指摘され提案された解決策では、頑張りが続かない場合があります。別の支援アプローチとしてストレングスモデルがあります。このストレングスモデルは、誰もが持っている「問題と付き合っていく力」を信じ、その人自身がなりたいたい姿に向かっていく「希望」を支援するアプローチです。このモデルは、その人の「ストレングス=つよみ」に焦点を当て、それを活用してその人の夢やなりたいたい姿の達成を目指します。支える人と支えられる人の関係は、お互いに尊重し合うパートナーシップに基づいています。ストレングスを支援に活かすことによって、生きにくい状況を持ちながらも地域で生活する人々の自信を培い、いきいきと自らの夢に向かって行動する変化が期待できます。また、支援する側にもポジティブな変化が起こっている可能性があります。

研究内容

ストレングスモデルでその人の夢や生き方、支援者を支える

これまで育児中の母親を対象に、抑うつ状態にある時の育児、子供に思わず手がでてしまう時の育児、夫の支援が育児に与える影響、「子どもを愛せない」ボンディング障害の状態にある時の育児について、何が起きているのかを明らかにしてきました。それらの状況にある母親は自分の行動を自覚し、自分の行動を何とかしたいと願っていました。そして、どの母親も自身がつよみ(ストレングス)に気づかずに育児している姿がありました。そこでまず、母親の持つストレングスとは何かを解明しようと取り組んでいます。また、ストレングスモデルを活用する支援者側には何が起きているのかについての解明にも取り組んでいます。

これら両者に起こることが明らかになれば、より効果的な支援の在り方につながると考えています。

その人の
ストレングス(つよみ)に注目

シーズ・地域連携テーマ例

- 育児中の母親へのストレングスを活用した支援
- ストレングスモデルの看護基礎教育における効果

論文

- How Nursing Students' Perceptions of People with Psychiatric Disabilities Change When Using the Strengths Model During Practicums: A Qualitative Research Study. M. Katayama, R. Aijo, K. Kitaoka, et al. Nurse Education Today, 2024
- 看護学生が精神保健看護実習で ストレングスモデルを自身の看護に取り入れるプロセス, 片山 美穂, 相上 律子, 北岡 和代, 日本精神保健看護学会誌, 32(2), 32-40, 2023
- Mothers with depressed mood: help-seeking from husbands and child-rearing behaviors, Miho Katayama, Kazuyo Kitaoka, Ritsuko Aijo, BMC Women's Health, <https://doi.org/10.1186/s12905-022-01604-5>, 2022
- 看護専門学校生に対する「支援ツール」を用いた学校生活支援の実践報告, 片山美穂, 鈴木由依子, 北岡和代他, 看護実践学会誌, 34(1), 43-50, 2022
- 子を叩いてしまう母親に対する育児友達役割, 片山美穂, 北岡和代, 相上律子, 日本周産期メンタルヘルス学会誌, 6(1), 83-88, 2020
- 抑うつ状態にある母親が子どもに感じる思いから辿る育児プロセス, 片山美穂, 北岡和代他, 日本看護科学会誌, 39, 174-182, 2019
- Psychosocial process in mothers with depressed mood who continue to fulfill their parenting responsibilities, Katayama M, Kitaoka K, Journal of Wellness and Health Care, 41, 9-22, 2018

講演・口頭発表等

- ストレングスモデルは看護学生の精神障害をもつ当事者の捉え方に何を起すのか?, 片山美穂, 相上律子他, 第44回日本看護科学学会学術集会, 2024.12
- 看護実習において看護学生がストレングスモデルを看護に活用するプロセス, 片山美穂, 相上律子他, 第43回日本看護科学学会学術集会, 2023.12
- Adoption of Strengths-Based Approaches to Patient Care among Nursing Students. Katayama M, Aijo R, Kitaoka K, 25th EAFONS 2022, 2022.10
- Process of changing emotions toward the child in a mother with bonding disorder, M. Katayama, et al, 25th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2022.4
- Mothers with Depression in Japan : Help-Seeking from Husbands and Child-Rearing Behaviors. Katayama M, Kitaoka K, Aijo R, 24th EAFONS 2021, 2021.4

競争的資金等の研究課題

- 虐待的育児リスクのある母親へのストレングスモデル適応の検証, 科学研究費助成事業(若手研究), 2022-2025
- 看護基礎教育におけるストレングスモデルの教育効果, 公立小松大学重点研究「みらい」助成 2021-2023
- ボンディング障害と虐待的育児との因果関係の解明, 科学研究費助成金 (スタート支援), 2020-2021

相上 律子 助教

修士(保健学)

Ritsuko Aijo

✉ ritsuko.aijo@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

精神保健看護学、認知科学、臨床神経心理学、
認知リハビリテーション

プロフィール

2016年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士前期課程 修了

2016年 京都大学医学部附属病院 看護部 看護師

2019年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

2025年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 医学専攻 医学博士課程在学中

研究分野

精神保健看護学

所属学会

日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、日本看護研究学会、石川県精神保健福祉協会、日本精神科看護学会、日本看護学会、日本学術会議協力学術研究団体北陸心理学会、日本精神障害者リハビリテーション学会、認知神経科学学会、日本統合失調症学会

専門分野・研究分野

病気になる人の認知機能改善を目指した認知リハビリテーションに関する研究

認知機能とは、知覚、注意、記憶、問題解決および計画を立てることに関わる認知やメタ認知過程を意味している。その認知機能が障害されると、日常生活における自立や就労、人間関係の構築を含む社会適応にまで大きく影響してしまう可能性がある。統合失調症がある当事者に関して言うと、妄想や幻覚といった、薬で治療できる症状が軽減されても社会適応の促進が困難となる場合がある。これは、先に述べたような認知機能障害が影響していると考えられており、その認知機能の改善において、“認知リハビリテーション”が注目されるようになった。認知リハビリテーションは、認知機能障害が原因で引き起こされる自立や就労の遅れなどに働きかけるというより、知覚、注意、記憶そして問題解決といった認知機能そのものに直接焦点を当てて訓練をすることで、認知機能の改善を目指す脳のトレーニングである。この認知リハビリテーションの治療効果は、欧米において、心理社会的治療の重要な1つとして、医療現場で組み込まれるようになった。しかし、日本においてこの取り組みは10年以上遅れを取っている。

そこで、この問題に対して対策が必要ではないかと考えた。具体的には、遅れの原因を医療現場で調査することや、トレーニング実施者が少ない地域でも実施できるように認知リハビリテーションのオンライン化を進め、治療システムの基盤をつくることである。現在は、これらについて追求することが社会への貢献につながると考え、研究に取り組んでいる。

研究内容

精神に障がいがある当事者を対象とした代償的認知トレーニングのオンライン化

認知リハビリテーションには、様々な介入方法がある。その介入方法の中でも現在、代償的認知トレーニング(Compensatory Cognitive Training; 以下、CCT)を活用した研究を開始している。このCCTの特徴は、損なわれた脳の機能自体を回復させることを目的とするのではなく、残っている機能をうまく利用した“認知機能の代償”を目的としている。認知機能の中でも、CCTが治療のターゲットとしている領域は、処理速度、注意／覚醒、作業記憶、学習／記憶、実行機能を含む複数の認知領域である。CCTは、他の認知リハビリテーションと比較すると、プログラム全体の介入頻度や実施期間が短く、入院病棟や精神科デイケアの集団プログラムなどにも、比較的取り入れやすい。しかし、取り入れやすいとはいっても、CCTを多くの職種が様々な場所で活用できるシステムを日本で確立することは、非常に難しい。さらに、日本においては、臨床での活用頻度が少ないため、どんなに効果が証明されていても、保険収載にはつながらないという現状がある。

そこで現在は、当事者を対象として、オンラインを取り入れたCCTの実施とその治療効果について調査している。その際、オンライン化することにより生じる当事者や医療者への効果についても明らかにしていく予定である。

認知リハビリテーションで
多くの人を支えたい！

シーズ・地域連携テーマ例

- 職務満足や就業継続意思に関する研究
- 認知リハビリテーションに関する介入研究
- ストレngthsモデルを活用した研究

論文

- How nursing students' perceptions of people with psychiatric disabilities change when using the strengths model during practicums: A qualitative research study, Katayama M, Aijo R, Kitaoka K, Kawaguchi M, Nurse Education Today, DOI: 10.1016/j.nedt.2024.106190, 2024
- Mothers with depression in Japan: Help-seeking from husbands and child-rearing behaviors, Katayama M, Kitaoka K, Aijo R, BMC Women's health, DOI: 10.1186/s12905-022-01604-5, 2022
- Relationship between job satisfaction and intention to remain among nurses working in a hospital in Japan, Aijo R, Kitaoka K, Katayama M, Journal of wellness and health care, 41(2), 113-127, 2017
- Burnout-related effects of emotional labor and work-related stressors among psychiatric nurses in Japan, Sakagami A, Aijo R, Nguyen Thi Thu H, Katayama M, Nagata K, Kitaoka K, Journal of wellness and health Care, 41(1), 97-111, 2017

口演・口頭発表等

- 遠隔化したCompensatory Cognitive Trainingの認知機能改善効果の検討：3か月のフォローアップ, 第44回 日本看護科学学会, 2024年12月
- ストレngthsモデルは看護学生の精神障害をもつ当事者の捉え方に何を起こすのか?, 第44回 日本看護科学学会, 2024年12月
- Compensatory Cognitive Trainingの遠隔化に向けた取り組み, 相上律子, 片山美穂, 北岡和代, 第43回 日本看護科学学会, 2023年12月
- 看護実習において看護学生がストレngthsモデルを看護に活用するプロセス, 片山美穂, 相上律子, 北岡和代, 第43回 日本看護科学学会, 2023年12月
- Reading the Atmosphere: The Process of Participant Relationship-Building That Takes Place Through Participation in Compensatory Cognitive Training, Aijo R, Matsui M, Katayama M, Kitaoka K, 27th East asian forum of nursing scholars, March 2023
- 案外悪くない：遠隔での代償的認知機能改善療法を完遂した参加者の心理的プロセス, 相上律子, 片山美穂, 北岡和代, 第42回 日本看護科学学会, 2022年12月
- Mothers with depression in Japan: Help-seeking from husbands and child-rearing behaviors, Katayama M, Kitaoka K, Aijo R, Oda A, Kato C, 24th East asian forum of nursing scholars, April 2021

競争的資金等の研究課題

- 統合失調症者の残存機能を活かす日本版認知機能改善療法の創生, 科学研究費助成金, 基盤研究 (C), 2023年度 - 2026年度

社会貢献活動

- 社会福祉法人なごみの郷 苦情解決第三者委員 (2024年4月 - 現在)
- ・ 石川県精神保健福祉家族会連合会 相談員研修会講演会 講師 (2024年9月10日)

木森 佳子 教授
博士(保健学)

Keiko Kimori

✉ keiko.kimori@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword

可視化技術、超音波技術、静脈穿刺技術、食事援助技術

プロフィール

2014年 金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了
 2011年 石川県立看護大学基礎看護学助教
 2016年 石川県立看護大学基礎看護学講座准教授
 2023年 公立小松大学保健医療学部看護学科教授

研究分野

看護学、応用物理学

所属学協会

日本褥瘡学会、日本創傷・オストミー・失禁管理学会、日本看護科学学会、看護理工学会、日本看護技術学会、看護実践学会、日本循環器看護学会、日本看護シミュレーションラーニング学会(看護シミュレーション教育指導者養成コースベーシックコース修了)、日本ポイントオブケア超音波学会



見えなかったものを「見える」化し、我慢させない

専門分野・研究分野

エコーなどを用いたフィジカルアセスメント技術に関する研究

採血や点滴注射の時、針を穿刺する静脈が「見えない」と穿刺に成功するまで何度も針を刺すことがあります。「見えない静脈」は、穿刺される患者さんも実施者も大きな苦痛を伴います。「見えない静脈」を見える化する機器を開発し、患者さんの苦痛を減らしたいと思っています。

また、高齢者は「状態が悪化しても症状を自覚することが難しい」ことがあります。近年では一人暮らしの方が増えました。様子を教えてくれる家族がいないのです。自分で症状の変化がわからず、訴えることも難しい方の身体的変化を、看護師はリアルタイムに、ベッドサイドで、客観的に生体内を適切に観察して対処することが重要になります。見えないのは「自分のせい」、体調が良くなくても「こんなもんや。」と我慢している患者さんを救うことを目的としています。

研究内容

看護師がエコー等の可視化技術看護技術に使用する探索的研究

見えない静脈に近赤外光を用いて可視化した画像を図1に示します。近赤外光は血液内のヘモグロビンに特異的に吸収される性質を持つので、静脈部分の光の量が少なくなり黒く映ります。臨床では、深くて見えない静脈を可視化してほしいニーズがあります。使用する光や光学材料の最適値、最適化を検討し、静脈画像の画像処理によって臨床ニーズに応える静脈画像を獲得することを目指しています。また、図2は心エコーの一つである下大静脈径を計測するために看護師が撮像した超音波画像です。近年ポケットサイズにサイズダウンしベッドサイドで使えるようになりました。再入院率の高い心不全患者に対し外来や訪問看護でポケット型エコーを使い、体液バランスの状態を把握し心機能への影響を予測できれば、状態の悪化を回避し地域での生活を守り続けることができます。



図1. シールの間にある見えない静脈を可視化した近赤外画像

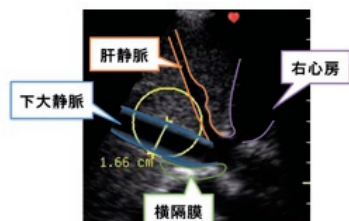


図2. ポケット型エコーで撮影した下大静脈

シーズ・地域連携テーマ例

- 末梢静脈穿刺技術の向上
- 在宅心不全患者のフィジカルアセスメント
- 高齢者の食事援助技術の向上

受賞

- 2021年9月 国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会優秀論文賞
- 2019年11月 第15回日本循環器看護学会学術集会優秀演題

論文

- 看護師による携帯型エコーを使用した下大静脈径測定教育プログラム評価, 木森佳子他, 日本循環器看護学会誌, 17 (2), 47-54, 2022年9月.
- Pilot study of a prototype for visualizing veins using near-infrared light to improve peripheral intravenous access capabilities, Kimori K., et al., Journal of Nursing Science and Engineering, 9, 162-169, 2022.
- 目視困難な末梢静脈可視化のための最適な近赤外光波長と狭帯域光法, 木森佳子他, 看護理工学会誌, 8, 203-210, 2021.
- Feasibility of Using a Pocket-Sized Ultrasound Device to Measure the Inferior vena cava diameter of patients with Heart Failure in the community Setting: A Pilot Study, Kimori K. et al., Journal of Primary Care & Community Health, 11, 1-6, 2020.
- Investigation of vasculature characteristics to improve venipuncture techniques in hospitalized elderly patients, Kimori K., International Journal Nursing Practice, 22(3), 300-306, 2016.

講演・口頭発表等

- Echocardiography of congestive heart failure for the early skin care of edema. Kimori K., et al., The 9th Asia Pacific Enterostomal Therapy Nurse Association Conference (Web), 2021.
- Investigation of Invisible Peripheral Veins for Certain and Safe Venipuncture in elderly patients: Non-invasive Measurement of Width, Depth, Skin Color, and position of artery relative to the vein. Kimori K., et al., The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars: EAFONS Conference, 2017.

競争的資金等の研究課題

- 最適な近赤外光波長を用いた目視困難な末梢静脈可視化システムの開発: 科学研究費助成事業 (基盤 (C)), 2021-2025.
- 目視困難な末梢深層静脈可視化のための近赤外光反射システムの改良と臨床応用: 科学研究費助成事業 (基盤 (C)), 2017-2020.
- 高齢者の静脈穿刺後皮下出血における皮膚バリア機能の評価: 科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究), 2015-2016.

社会貢献活動

- 看護実践学会誌査読委員 (2021年一現在)
- 看護理工学会学会誌査読委員 (2014年一現在)
- 日本看護シミュレーションラーニング学会誌編集委員 (2022年一現在)

今方 裕子

准教授
博士(保健学)

Yuko Imakata

✉ yuko.imakata@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

がん看護、化学療法、浮腫、皮膚障害

プロフィール

2022年 金沢大学大学院 医薬保険学総合研究科 保健学専攻 博士後期課程修了
2018年 石川県立看護大学 成人・老年看護学講座 助教
2023年 石川県立看護大学 成人・老年看護学講座 講師
2024年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 准教授

研究分野

がん看護学

所属学会

日本がん看護学会、日本創傷・オストミー・失禁管理学会、日本緩和医療学会、
日本看護科学学会、看護理工学会、日本死の臨床研究会、看護実践学会、
国際リンパ浮腫フレームワークジャパン研究協議会、日本看護協会

がんサバイバーの
健やかな暮らしを実現したい

専門分野・研究分野

がん治療の中止に至ることがない支持療法確立を目指す

がんは、日本における死因第一位を占めており、死亡数は増加し続けている。手術・化学療法・放射線療法が発展する一方で、その副作用によって患者のQOLに大きな影響を及ぼしている。さらに副作用が重度となることで、QOLの低下のみならず、がん治療の中止に至り患者の生命予後に影響を及ぼす可能性がある。そのため、がん治療中止に至ることがない支持療法確立を目指し、看護ケアの技術開発を行っている。

研究内容

がん治療による浮腫や皮膚障害などの副作用へのケア開発

がん治療による浮腫や皮膚障害などの副作用について、超音波画像診断装置(エコー)を用いた観察や、教育プログラムを構築し、早期発見・早期治療に導くためのケアを探求している。がん化学療法投与中に出現する浮腫に関しては、これまで乳がんドセタキセル投与中の下肢浮腫の出現要因を明らかにした。また、エコーを用いた観察によって下肢浮腫の特徴を明らかにした。今後がん患者の浮腫予防ケアの開発のため、多職種の専門家と協働しエビデンス構築を図りたい。



図1. 化学療法による副作用で生じた浮腫

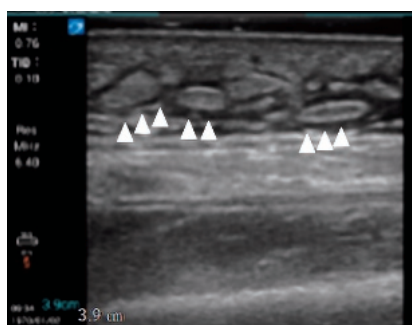


図2. 浮腫が悪化した際にみられるエコー画像(敷石様像)

シーズ・地域連携テーマ例

- がん化学療法の副作用に関するケア技術開発
- 化学療法関連浮腫のエコーアセスメントに関して
- 施設や地域でのがん看護専門看護師活動

受賞

- 2023年7月 2023年度 学術論文優秀賞, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会
- 2023年5月 ベストティーチャーズ賞, 石川県立看護大学
- 2015年6月 第20回日本緩和医療学会学術集会 優秀演題

論文

- 超音波画像診断装置を用いた浮腫観察技術習得のための教育プログラムの評価 今方裕子他 リンパ浮腫管理の研究と実践 11 (1) 9-15 2024年6月
- がん患者が悪い知らせの受容過程において認識した認定看護師・専門看護師の看護実践 今方裕子他 死の臨床 46 (1) 169-174 2024年6月
- Characteristics of Developmental and Healing Process of Docetaxel-Induced Lower Limb Edema in Patients with Stage IV Breast Cancer: A Case Series Yuko Imakata et al Palliative Medicine Reports 4 (2) 2023年2月
- Clinical features of lower limb edema in patients with breast cancer who underwent docetaxel chemotherapy: a retrospective observational study Yuko Imakata, JWOCM 26 (3) 269-277 2022年1月

講演・口頭発表等

- Clinical features of edema in patients with breast cancer receiving docetaxel: A scoping review Yuko Imakata et al 第31回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会 2023年3月

競争的資金等の研究課題

- 乳がん患者に対するドセタキセル療法中に生じる下肢浮腫の早期発見方法の確立 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 2024年4月-2027年3月
- ドセタキセルの投与を受けた乳がん患者の下肢浮腫の臨床的特徴に関する観察研究 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 2021年4月-2024年3月

山田 奈津子 助教
修士(看護学)
Natsuko Yamada
✉ natsuko.yamada@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword クリティカルケア看護師、重症患者、身体ニーズ、非言語、cue

プロフィール

2012年 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科博士(前期)課程 修了
2012年 聖マリアンナ医科大学病院 看護師
2013年 急性重症患者看護専門看護師(日本看護協会)取得
2015年 金沢医科大学 助教
2021年 帝京大学 福岡医療技術学部 看護学科 講師
2023年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

研究分野

臨床看護学、クリティカルケア看護学、学習科学

所属学協会

日本クリティカルケア看護学会、日本CNS看護学会、日本看護科学学会

専門分野・研究分野

重症患者の看護アセスメントに関する研究 意思表示困難な患者が発するメッセージ“cue”

“cue”とは言語的な意思表示ができない人が、何らかの方法で発するサインである。

たとえば、母子間において言語的な意思表示ができない乳児の非言語的反応である“cue”を母親が合図として読み取り、母子相互作用が促進される。

ICU(集中治療室)に入室している患者は、生命の危機的状態にある。このため、意識が混濁しており、救命や生命維持を目的とした人工呼吸器や補助循環装置が装着されているなど、意思表示が困難な状態であることが多い。

私はICUで看護師として勤務する中で、重症患者と向き合う看護師が、測定機器の数値やしぐさの微細な変化を通して伝える苦痛や苦悩などのメッセージを読み取り、患者の苦痛に寄り添う看護ケアを目の当たりにし、“cue”の概念に着目した。

“cue”の構成概念や“cue”を読み解く手法はいまだ明らかではなく、熟達した看護師は直観や手探りで“cue”を察知している。

研究内容

微細なサイン“cue”が発する患者の思いを汲み取る

ICUに入室する重症患者をケアする看護師を対象にしたインタビューにより、看護師がキャッチする意思表示困難な重症患者の“cue”の構成概念と、看護師が“cue”を察知し、これを読み解くプロセスを明らかにした。

さらに、この研究を通して、看護師は患者の思いを読み解くプロセスを繰り返すことにより、“cue”に対する感受性を高めていることがみえてきた。今後は、看護師が“cue”をキャッチし重傷患者の意思を読み解き支援する方法を確立する研究に取り組んでいく予定である。

観面	カテゴリー	概念
cueを捉える	訴えに気づく	目や口、指先などのわずかな動きや刺激によって起こる些細な反応またはデータの指標は患者の伝えられた表現 わずかな動きや反応は患者の思いを理解する手がかり
	ケアの希求	重症患者のわずかな動きや反応を通して表される病状や思いのメッセージ 重症患者自身が発するニーズや援助を欲し身体全体で訴える言葉にならない声
	顕在・潜在的ニードを推察する	患者の表情やバイタルサインから患者の苦痛や不安を推察する 得られた情報や処置による患者の反応や症状を予測する
cueを読み解く	五感をを用いて確認する	声かけや刺激を与え患者の反応を探し出す モニターの変化やアラーム音で察知した患者の変化や異常を自らの五感を通して検証する 患者の家族や特別に人に示す反応を読み取る
	潜在的ニードを掘り起こす	患者の状況を自分自身や身近な人に置き換え潜在的ニードを掘り起こす 重症患者のわずかな動きと身体状況を照らし合わせて患者の思いとて言い換える 得られた情報から患者の身体状況について絞り込んでいく
ケアを創り出す	ケアの方向性を創る	処置に対する患者の反応からケアのタイミングを見計らう 患者の身体状況の推移や経過を医師に伝え薬剤投与など処置が施されるように協定する
	患者を意思ある存在として尊重する	重症患者は侵襲的治療によって何らかの苦痛を感じている存在としてみなす 侵襲的治療を受ける重症患者の回復のイメージから日常生活の再獲得について見直す
cueへの感受性を高める	読み取りの課題により感受性を高める	経験に培われた感覚を頼りに患者の思いに近づくため自問自答する わずかな動きからでも患者の感覚や思いに沿うことで患者の安心を高める 患者のわずかな動きや反応を繰り返し確認し患者の思いに沿う経験を積み重ねる

表1 意思表示が困難な患者のcueの理解と看護アセスメント



重症患者の声なき声に応えたい

シーズ・地域連携テーマ例

- 看護、介護、福祉関係者を対象にしたフィジカルアセスメント技術

受賞

- 2018年6月日本クリティカルケア看護学会優秀論文賞

論文

- クリティカルケア看護師の侵襲的治療を受ける意思表示が困難な患者のcueの理解と看護アセスメント、山田奈津子他、日本クリティカルケア看護学会誌13 (1), pp49-57, 2018年4月
- 看護学生のストーマサイトマーキングにおける超音波画像診断装置を用いた腹直筋確認技術の信頼性、紺家千津子他、日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌24 (3), pp281-288, 2020年11月
- COVID-19パンデミック開始段階における看護師の心理社会的反応に関する文献レビュー、古賀 雄二他、日本クリティカルケア看護学会誌19, pp184-196, 2024年3月

書籍等出版物

- 【授業がわかる！実習で使える！基礎のバイタルサイン臨床のバイタルサイン】基礎の呼吸測定、山田奈津子、Nursing Canvas, 1 (1), メディカル出版, 2013年4月
- 【患者の不安・痛みなどの訴えをどのようにとらえ、記録するか？】言葉に表れない表情やしぐさから痛みや不安をどのようにアセスメントしケアに結びつけていくべきか、看護さくらと看護過程、日経研出版, 2015年12月

講演・口頭発表等

- クリティカルケア看護師の侵襲的治療を受ける意思表示が困難な患者のcueの理解と看護アセスメント、第8回日本クリティカルケア看護学会学術集会, 2012年6月
- cueの文献レビューによる意思表示困難な重症患者の非言語cueの理解、第38回日本看護科学学会学術集会, 2018年11月

競争的資金等の研究課題

- 重症意思表示困難患者のcueの理解により身体ニーズアセスメント尺度の開発、科学研究費補助金(若手研究B), 2016-2019

社会貢献活動

- 日本クリティカルケア看護学会 評議員(2020年～)
- 日本クリティカルケア看護学会 せん安委員会副委員長(2020年～2023年)
- 日本クリティカルケア看護学会 専任査読委員(2020年～)

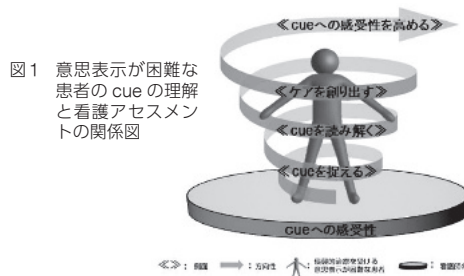


図1 意思表示が困難な患者のcueの理解と看護アセスメントの関係図

青木 頼子 准教授
博士

Yoriko Aoki

✉ yoriko.aoki@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword意思決定支援、意思決定ガイド (Decision aid)、
地理情報システム (GIS)、高齢者、脳卒中

プロフィール

2020年 聖路加国際大学大学院 看護学研究科 博士後期課程修了
2001年 金沢大学附属病院 看護師
2008年 富山大学 学術研究部医学系 助教
2025年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 准教授

研究分野

老年看護学 / 看護情報学

所属学会

日本看護科学学会、日本老年看護学会、日本看護研究学会、日本医療情報学会、日本公衆衛生学会



高齢者の意思を大切にする

専門分野・研究分野

高齢者が納得した意思決定を
家族や医療者と一緒に行うにはどうしたら良いのか？

脳卒中に罹患した高齢者の退院先の意思決定場面では、本人が意思決定に参加できないまま希望の場所に帰れず落胆する場面に何度も遭遇する。さらに施設の種類や社会サービスが多様化する中で、医療と福祉の情報量の多さが意思決定を困難にしている。これを解決するため、意思決定を促進できるように構造化された価値観に基づく意思決定ガイドを開発しその効果を検証したところ、不安の解消、参加率低下の抑制、価値観を明確にする効果が得られた。今後、高齢者が、家族や医療者と情報や意思決定プロセスを共有し、双方の納得のもと満足した意思決定ができるよう貢献したい。

研究内容

「高齢者と家族の意思決定支援」と
「GISを用いた社会サービスの充足度」

1. 脳卒中高齢者と家族の価値観を基盤とした退院先選択のための「意思決定ガイドWEB版」の開発

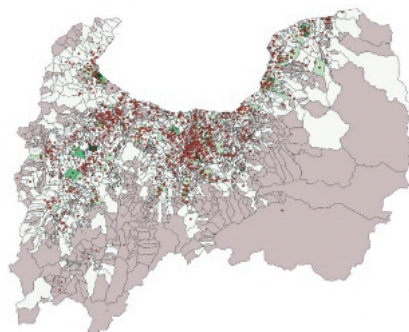
紙媒体の意思決定ガイドは、個別性を重視すれば情報量が増えることになり、一般性を重視すれば価値観の重要度に差がつかないという課題を残している。そこで、人工知能 (AI) を融合した「意思決定ガイド Web 版」の開発に取り組んでいる。

2. 地理情報システム GIS を用いた社会サービスの充足度

脳卒中に罹患した患者は、要介護状態となりやすく、退院先や退院後の生活の質は、利用できる社会サービスから影響を受けやすい。しかし、多死社会による人口の歯抜け減少により、患者が広範囲に点在するため、効率的で質の高いサービス提供体制が喫緊の課題である。そのため、GIS を用いて脳卒中患者の人口、事業所が空間的にどのように分布しているのかを分析し、社会サービスの過不足している地域の特定を行っている。



1. 意思決定ガイド



2. GISを用いた脳卒中患者人口と事業所のプロット図

シーズ・地域連携テーマ例

- 高齢者と家族の意思決定支援
- 地理情報システムGISを用いた社会サービスの充足度

受賞

- 日本リハビリテーション看護学会奨励賞 (2018)

論文

- Aoki, Y., Nakayama, K., & Yonekura, Y. (2024). A randomized controlled trial on the effects of decision aids for choosing discharge destinations of older stroke patients. PLOS ONE, 19 (1), e0272115.
- Aoki, Y., & Nakayama, K. (2022). Development of a values-based decision aid to determine discharge destination: Case reports of older stroke survivors and their families. Medicine, 101 (41), e30934.
- Aoki, Y., & Nakayama, K. (2022). Improving older adults stroke survivors' decision-making when selecting a discharge location: A randomized controlled trial protocol. International Journal of Nursing Knowledge, 34 (3), 185-192.

書籍等出版物

- 青木頼子 (2021). 脳卒中高齢者のケアとリハビリテーションー脳卒中高齢者と家族の意思決定支援ー. 臨床老年看護, 28 (4), 40-47.
- 竹内登美子 (編著), 青木頼子ほか (2015). 脳神経疾患で手術を受ける患者の看護. 医歯薬出版. (第5章 水頭症患者の周手術期看護, pp.138-149).

講演・口頭発表等

- Aoki, Y., Nakayama, K., & Yonekura, Y. (2022). Conflict and participation effects caused by decision aids in choosing discharge destinations for elderly stroke patients: Randomized controlled trial. 22nd Society for Medical Decision Making 44th Annual North American Meeting.
- 青木頼子, 中山和弘 (2018). 回復期リハビリテーション病棟における脳卒中高齢者の退院先選択のための意思決定ガイドの開発. 第38回日本看護科学学会学術集会 (愛媛).

競争的資金等の研究課題

- 脳卒中高齢者の価値観とAIを融合した「退院先選択時の意思決定ガイドWeb版」の開発. 科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 研究代表者, 2023-2026.
- 臨床実用化に向けた「退院先選択のための意思決定ガイド」の効果検証と標準化への提言. 科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 研究代表者, 2019-2024.
- 高齢者本人と家族の意向を尊重した療養場所選択のための意思決定支援ガイドの開発. 科学研究費助成事業 若手研究 (B), 研究代表者, 2015-2020.
- 意思表示できない脳血管疾患患者の高齢配偶者が行う代理意思決定プロセスのモデル構築. 科学研究費助成事業 若手研究 (B), 研究代表者, 2010-2012.

社会貢献活動

- 看護記録研修会講師 (富山県リハビリテーション病院・こども支援センター) (2019-2023)
- 看護研究講師 (富山県立富山いずみ高等学校) (2011-2016)

誉田 恵理 助教 博士(保健学)

Eri Konda

✉ eri.konda@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

老年看護学、糖尿病、セルフケア、オーラルフレイル

プロフィール

2013年 金沢大学附属病院 看護師

2018年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

2019年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 博士後期課程 修了

研究分野

老年看護学、慢性看護学

所属学会

日本老年看護学会、日本認知症ケア学会、日本糖尿病教育・看護学会、看護実践学会、日本看護科学学会

専門分野・研究分野

糖尿病を抱える高齢者の「食べること」への支援に関する研究

「いかに自立して健康で暮らせるか」という QOL を考慮した健康寿命の延伸が、現在社会で強く求められています。しかしその健康寿命を短縮する大きなリスクのひとつとして糖尿病があります。

私は、高齢期に糖尿病と診断された方に対し、自分らしさを大切にしながら生活できるような療養支援のありかたに関する研究に取り組んでいます。その中で、高齢糖尿病の方の QOL を最大限に高めるためには「食べること」への支援が重要だと強く感じ、歯周病の問題に着眼しました。糖尿病患者の歯周病罹患率は糖尿病でない人の 2～3 倍高く、高血糖持続により歯周病が悪化し、治癒ににくいといわれています。歯周病はオーラルフレイル（口腔虚弱から生活機能の低下をきたす状態）の要因の一つであり、高齢者の QOL の低下につながることから、オーラルフレイル予防に関する研究に取り組んでいきたいと考えています。

研究内容

早期から取り組む健口づくりでオーラルフレイル予防を目指した介入プログラムの作成

高齢期に糖尿病と診断された方に対しての、面接調査や診療場面の観察、自記式質問紙調査から、糖尿病の療養生活において「食べること」は、非常に大きな意味をもつことを明らかにしました。その結果から、その人らしく老いることを支えるためには、「食べること」を整えていくことが必要不可欠だと考えました。

そこで、本人の美味しく食べ続けたいという思いを実現していくために、糖尿病と歯周病の双方向的悪循環を断ち、オーラルフレイルやさらに重症な口腔機能低下・障害への進展を出来るだけ早い段階で食い止める健口づくりを目指します。まずは地域で暮らす高齢糖尿病の方の口腔環境を含む摂食嚥下機能の現状を把握し、オーラルフレイルへと進展しないための有効な介入方法を探っていきたいと考えています。

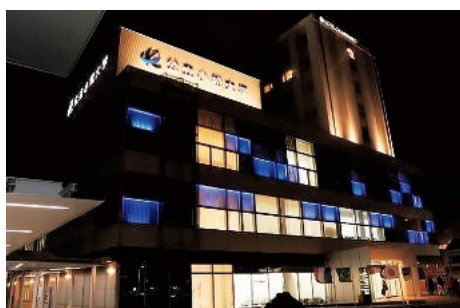


図1. 2019年度世界糖尿病デーに公立小松大学中央キャンパスがブルーライトアップされた様子



シーズ・地域連携テーマ例

- 高齢期に糖尿病診断を受ける患者の療養支援
- 地域高齢者のオーラルフレイル予防

論文

- Development of a Measurement Scale to Evaluate Self-Care Stability for Patients Diagnosed with Type 2 Diabetes at an Older Age, Konda E et al., Open Journal of Nursing, 8, 905-917, 2018
- 金大式パートナーシップによる糖尿病患者への療養支援の実態、藤田 結香里、越野恵理、長田春香、竹内弘美、日本看護学会論文集：慢性期看護、46, 142-145, 2016
- 診断時高齢の2型糖尿病患者がセルフケア行動を習得していく過程での経験、越野恵理、稲垣美智子、多崎恵子、日本糖尿病教育・看護学会誌、第19巻第2号、111-120, 2015

講演・口頭発表等

- 診断時65歳以上の高齢2型糖尿病患者がセルフケア行動を習得していく過程での経験、越野恵理 他、第18回日本糖尿病教育・看護学会学術集会、2013

競争的資金等の研究課題

- オーラルフレイルを見据えた糖尿病高齢者の新たな歯周病予防介入プログラムの確立：科学研究費補助金（若手研究）2019-2027（産休・育休のため途中中断・延長あり） 代表者

社会貢献活動

- 2019年度世界糖尿病デー 糖尿病啓発イベント＆ブルーライトアップ企画（主催：公立小松大学、共催：小松市医師会糖尿病連携推進協議会）（2019年11月14日）
- 小松市オーラルフレイル研究会（2018-）
- 石川県野々市市介護認定審査会委員（2011-2012年度）
- 北陸小児糖尿病サマーキャンプ：昭和50年（1975年）に、日本では9番目の開催としてスタートし、毎年8月に3泊4日程の日程で開催されています。幼児から高校生までの1型糖尿病を抱える子どもたちと、それを支える多くのボランティアスタッフが集って行われます。私もボランティアスタッフとして携わらせてもらっています。（2011-2013年度、2016年度、2018年度参加）



図2. 北陸小児糖尿病サマーキャンプにて朝の日課、ラジオ体操を行う様子

津田 裕子 助教
修士(看護学)

Hiroko Tsuda

✉ hiroko.tsuda@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword

便秘、高齢者看護、ポリファーマシー、多職種連携

プロフィール

2004年5月～2020年3月 こまつ看護学校 専任教員
 2018年4月～2020年3月 石川県立看護大学大学院看護学研究科 博士前期課程 修了
 2020年4月～2022年4月 公立小松大学 助手
 2021年4月～現在 石川県立看護大学大学院看護学研究科 博士後期課程 在学中
 2022年5月 公立小松大学 助教

研究分野

ライフサイエンス / 高齢者看護学、地域看護学

所属学会

日本老年看護学会、日本創傷・オストミー・失禁管理学会、日本褥瘡学会、看護理工学会、
 日本看護科学学会、日本看護学教育学会、看護実践学会、役割交換書簡法・ロールレタリング学会

専門分野・研究分野

高齢者が「すっきり・気持ちよく排泄できる」環境を整えたい

高齢になると、腸管の蠕動運動が低下や腸内細菌叢の変化が起こります。若い頃よりも食事量(食物繊維)や水分摂取量・運動量も減るなど生活の仕方も変化します。その結果便秘になりやすく、下剤を服用する高齢者は少なくありません。しかし、下剤が効きすぎて下痢になり、下痢を止める薬が処方され便秘になるなどの悪循環を起こすケースも見られます。おいしく食べて、すっきり気持ちよく排泄する。この当たり前のことが高齢期では難しくなることが多いのです。高齢者のQOLの維持向上のためにも、高齢者が気持ちよく排泄できる環境を整えられるよう研究に取り組んでいます。

研究内容

高齢者の排便に関するアセスメントとケアの研究

75歳以上の4分の1の高齢者が7種類の内服をしています。薬の副作用は6種類以上で起こりやすくなると言われています。私自身重篤な副作用が現れた高齢者とかかわった経験もあり、薬の効果をアセスメントすることの重要性和難しさを感じていました。そこで、介護老人保健施設において、看護師が多剤服用の弊害を改善するためにどのような介入を行っているのか看護師にインタビューしました。そこで分かったことは高齢者の場合、新たに起こった症状が薬の副作用なのか病気の状況が悪化したのかのアセスメントが非常に難しいということです。看護師は迷いながら身体の中で起こっていることを予測し、そのことを確かめる観察を繰り返し行っていました。

看護師の語りには下剤の副作用に関するものがあり排便管理の困難さを感じました。心地よい排泄が行えないことは苦痛を伴い、高齢者のQOLを著しく低下させると強く感じました。この研究成果を活かし、今後の研究では、排便に関するアセスメントや効果的な薬の使用法を含めた排便管理の方法について明らかにしていきたいと考えています。



図1. 介護老人保健施設の看護師によるポリファーマシー改善への対応



シーズ・地域連携テーマ例

- 高齢者の排泄ケア、高齢者と薬

論文

- 看護専門学校生に対する“支援ツール”を用いた学校生活支援の実践報告, 片山美穂, 鈴木由依子, 北岡和代, 矢口和美, 前田朱美, 津田裕子, 久司瑠璃子, 看護実践学会誌34 (1) 2022年2月

講演・口頭発表等

- 排便に関する不快感やニードを医療者が十分に把握できない入院患者における排便管理の実態, 津田裕子, 紺家千津子, 松本勝, 小柳礼恵, 仲上豪二郎, 須金淳子, 真田弘美, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会第32回学術集会, 2023.7
- 介護老人保健施設における看護師のポリファーマシー改善への介入, 津田裕子, 川島和代, 日本老年看護学会第26回学術集会, 2021.6
- ロールレタリングを活用した学生支援の実践報告, 前田朱美, 津田裕子, 津山玲奈, 片山美穂, 久司留理子, 大井千都世, 矢口和美, 鈴木由依子, 飛田敦子, 第13回看護実践学会学術集会, 2019.9
- 看護師養成所における異学年交流活動を通しての教育効果, 矢口和美, 久司留理子, 大井千都世, 前田朱美, 片山美穂, 津田裕子, 津山玲奈, 鈴木由依子, 飛田敦子, 第13回看護実践学会学術集会 2019.9
- 手術患者のコーピングを高める看護介入 患者が看護計画立案に参加して, 津田裕子, 立花常代, 三国裕美子, 西川晶子, 豊田真奈美, 第56回国立病院総合医学会, 2001
- 末期癌患者の看護のために試案したペインスコア表とQOLチェック表について, 太田裕子, 中西博子, 高野沙知子, 第46回国立病院総合医学会, 1991

競争的資金等の研究課題

- 革新的な観察手法によるおむつ内皮膚障害のアセスメントツールの開発と検証, 科学研究費補助金(基盤研究C) 2022年～2025年

社会貢献活動

- 小松市オーラルフレイル研究会

小田 梓 助教 博士(保健学)

Azusa Oda

✉ azusa.oda@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

小児看護、糖尿病、睡眠、CGM、夜間低血糖

プロフィール

2019年 金沢大学大学院 医業保健学総合研究科 保健学専攻 博士後期課程 修了

2019年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

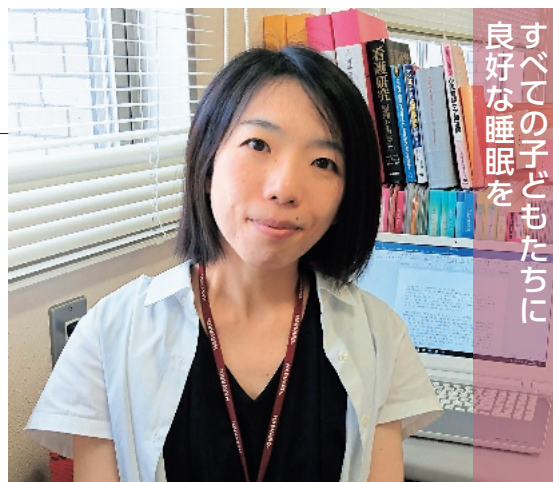
研究分野

小児看護学

所属学会

日本看護科学学会、日本糖尿病教育・看護学会、看護実践学会、日本小児・思春期糖尿病学会、

日本睡眠学会

すべての子どもたちに
良い睡眠を

専門分野・研究分野

1型糖尿病をもつ子どもと親が 良い睡眠を獲得するための睡眠ケアプログラムの確立

近年、1型糖尿病をもつ子どもの睡眠障害への対策が重要視されています。睡眠の質が悪い場合血糖コントロールが不良となること、またその逆が起こる可能性があることが報告されています(図1)、その要因の一つに夜間低血糖があります。特に小児では夜間低血糖は無自覚性であり、重症低血糖の遷延が認知機能障害をもたらす問題があります。そのため、睡眠中も家族による的確な対処行動が必要となります。しかし、1型糖尿病の睡眠障害や夜間低血糖において、具体的な対策は示されておらず、ケアへの示唆を得る段階までには至っていないのが現状です。そこで、1型糖尿病をもつ子どもとその家族を対象に、良好な睡眠を支援する睡眠ケアプログラムの確立を目標として研究を進めることにしました。

研究内容

1型糖尿病をもつ小児の血糖－睡眠モニタリングによる 夜間低血糖予測・回避の実践検証

健康な子どもでは、睡眠中も血糖値は正常範囲内に調節されますが、インスリン治療が必須の1型糖尿病をもつ子どもでは、睡眠障害のリスクに加え、低血糖の55%が睡眠中に起きていることが明らかになっています。頻回な夜間の低血糖発現の検知に寄与するものとして、2015年にわが国でも持続血糖モニタリング(Continuous Glucose Monitoring:CGM)が導入されました。CGMにより24時間連続で血糖の変動が可視化され(図2)、子どもも家族も糖尿病負担が軽減されています。しかし、モニタリングが可能となったものの、睡眠中の血糖をコントロールすることは依然として困難です。ここで、CGMと睡眠のモニタリングを同時に行うことに着想しました。双方向の時間的関係を評価することで、夜間低血糖のリスクを予測可能とする睡眠時および先行する客観的指標を探索する研究を行います。

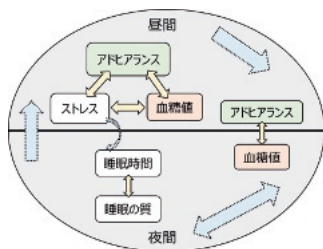


図1:1型糖尿病の24時間循環サイクル
(Monzon 2018より)

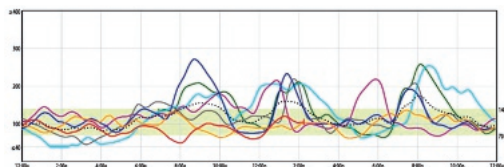


図2:CGMデータ例

シーズ・地域連携テーマ例

- 糖尿病患者用「睡眠－覚醒行動」記録アプリの開発

論文

- Profiling of sleep models based on voluntary and involuntary sleep in adults with type 2 diabetes, Azusa ODA et al, Sleep and Vigilance 6; 359-365, 2022
- The Concept of Sleep Ability and its Effect on Diabetes Control of Adults With Type 2 Diabetes, Azusa Oda et al, Canadian Journal of Diabetes 43(5):329-335, 2018
- Validation of the relationship consciousness of Japanese Patients with type 2 diabetes scale, Miki Koike, Azusa Oda et al, International Journal of Nursing Sciences 6(1): 31-37, 2018
- Development and Testing of the Family Structure and Family Functions Scale for Parents Providing Adolescent Reproductive Health Based on the Friedman Family Assessment Model, Susanto Tantut, Azusa Oda et al Journal of Nursing Measurement, 26(2): 217-236, 2018
- 2型糖尿病患者の失感情症・失体感症、睡眠、抑うつの実態と関連、小田梓 他、日本糖尿病教育・看護学会誌, 22 (1), 2018
- 2型糖尿病患者における睡眠の実態と睡眠パターン分類－睡眠計を用いた測定データによる検討－, 小田梓 他、日本糖尿病教育・看護学会誌, 21巻2号, 2017
- 2型糖尿病患者が入院に至るまでのセルフマネジメント、小田梓 他、看護実践学会誌, 29巻2号, 2017

講演・口頭発表等

- “Blood glucose-Sleep Monitoring” in a child with type 1 diabetes (case study), Advanced Technologies & Treatments for Diabetes, Feb,2023
- 健康成人の血糖－睡眠同時モニタリングによる夜間低血糖と睡眠ステージとの関連検証(症例報告), 日本看護科学学会, 2021年12月
- Profiling of sleep models based on voluntary and involuntary sleep in adults with type 2 diabetes, Advanced Technologies & Treatments for Diabetes, Jun, 2021

競争的資金等の研究課題

- 1型糖尿病をもつ小児の「血糖－睡眠モニタリング」による夜間低血糖の予測～科学研究費補助金(若手研究)2025-2029
- 1型糖尿病をもつ小児の血糖－睡眠モニタリングによる夜間低血糖の予測・回避の実践検証、科学研究費補助金(若手研究)2020-2024

社会貢献活動

- 北陸小児糖尿病サマーキャンプ 事務局(2012年-現在)
- シーズ・ニーズマッチングシンポジウム2022講師
- こまつ市民大学2021講師

前田 朱美 助教

修士(保健学)

Akemi Maeda

✉ akemi.maeda@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

発達特性 発達障害 乳幼児 家族支援 子どもの権利
看護教育

プロフィール

2019年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士前期課程 修了

1998年 こまつ看護学校 専任教員

2020年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助手

2022年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

研究分野

小児看護学 生涯発達看護学

所属学協会

日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本小児保健協会、日本看護倫理学会、日本看護学教育学会、看護実践学会、日本公衆衛生看護学会、北陸公衆衛生学会

専門分野・研究分野

発達障害のある子どもと家族が安心して医療機関を受診できる支援

発達障害のある子どもは、アレルギー、胃腸障害、頭痛など健康問題のリスクが通常の子どもより高いと言われています。また、てんかんなどの脳波異常や睡眠障害などの合併症があることが知られており、健康問題や健康管理に関する医療的ニーズがあります。

子どもが病気になり受診する医療機関は日常とは異なる環境です。子どもは、症状に伴う苦痛に加え、見慣れない環境の中で普段は経験しないことに遭遇することになり、より多くの不安や恐怖を抱くことになります。

発達障害のある子どもは、状況の読み取りが苦手であったり、嫌なこと、怖いことをより強く感じるという特性があります。また、医療設備や医療器具などから感じる感覚(触覚、嗅覚、視覚、聴覚など)は通常感覚とは全く違うと言われています。さらに、何が嫌なのか、何に困っているのかなどを表現することが苦手です。結果、不適応行動を起こすことになります。

発達障害のある子どもをもつ家族は医療機関に対して、発達障害の理解の不足から生じる不満や受療行動の障壁を感じていることが報告されています。健康問題を抱える発達障害のある子どもに適切な支援が実施されれば、医療への抵抗や恐怖は増幅し、その後の受療行動に影響を及ぼします。小児期に安心して医療機関を受診できた経験は青年期以降の適切な保健行動につながると考えます。

これらのことより、発達障害のある子どもと家族が安心して医療機関を受診できるための支援を目的に研究に取り組んでいます。

研究内容

医療機関における看護師の発達障害のある子どもと家族へのプレパレーション

子ども達は、認知発達に応じた方法で、病期や治療、検査・処置などの説明を受けた場合、その必要性を理解し、その子なりに状況を受け止めて、おとなとは違うその子なりの納得の仕方での治療や処置を受けることができます。その環境を整え機会を与える関わりをプレパレーションと言います。プレパレーションは、子どもや家族の人権や利益を考えた看護ケアです。

発達障害のある子どもに対してプレパレーションを行う際には発達の特徴性を考慮することが求められます。その実践には、看護師の、知識、思考、行動、性格、動悸、価値観、環境などが影響すると考えられるため、それらの実態や関連を明らかにしていきます。これらを明らかにすることで、発達障害のある子どもの特性をふまえたプレパレーションの課題を見出し、教育プログラムの構築に繋がたいと考えています。



発達に特性のある子どもとその家族の支援者になる

シーズ・地域連携テーマ例

- 発達障害の疑いのある子どもとその母親への支援技術
- ロールレタリングを活用した学生支援

論文

- 発達障害の疑いのある児とその母親が参加する遊びの教室における保健師の支援技術, 前田朱美, 表志津子, 岡本理恵, 中田明恵, 北陸公衆衛生学会誌, 48 (1), 1-9, 2021

講演・口頭発表等

- ロールレタリングを活用した学生支援の実践報告, 前田朱美, 津田裕子他, 第13回看護実践学会学術集会(石川), 2019年9月
- 発達障害の疑いのある児とその母親が参加する遊びの教室における保健師の支援技術, 前田朱美, 表志津子, 岡本理恵, 中田明恵, 水本ゆきえ, 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会(愛媛), 2020年1月

結果	
◆研究協力者の概要: 男性1名・女性11名, 平均年齢36.8歳, 保健師経験年数13.2年, 遊びの教室経験年数5.5年	
◆教室の概要: 約2時間30分, 自由遊び, 設定遊び, 話し合い等, スタッフ…保健師, 保育士, 臨床心理士, 作業療法士等	
カテゴリ	サブカテゴリ (一部抜粋)
継続参加を支える	教室参加の理由を母親がどのように受け止め理解しているか確認する 子どもの発達や困っていることと解決策を一緒に考えていくことを伝える 母親の特性に合わせて母親が教室参加したいと思える心地よい教室の場づくりをする
子どもの発達の促進につながる教室づくりをする	機会を逃がさず子どもの発達を伸ばす関わりをする 保育園で経験する場面をプログラムに組み込み就園に向けての準備をする
子どもの発達状況を見極められる教室づくりをする	子どもがなじみやすいプログラムをつくる 子どもの普段の状況が表れるように同じ内容、流れのプログラムにする
子どもの発達状況を見極める	遊びの中で子どもの発達状態をアセスメントする 子ども同士の関係から社会性をアセスメントする
母親の気持ちに寄り添い先を見極めた関係をつくる	母親の思いを受け止め認める 母親が悪い点を責めた機会を逃さない 母親が子どもの発達に特徴があることに気づくのを助ける
母親の子どもへの伝え方の改善を支える	母親の子どもへの伝え方の改善を助ける 母親の子どもへの伝え方の改善を助ける
母親の子どもへの関わり方の改善を支える	母親の子どもへの関わり方を具体的に示す 母親に子どもの発達を伸ばす関わり方を伝える 母親の特性や心情に併せて伝え方を調整する
母親の受容過程を支える	発達相談や診断を受けるまでを見守る 母親と関係機関のつなぎ役をする 発達障害の疑いのあることを判断し母親に伝える役割を助ける
母親同士のピアサポートを支え子育で力を支える	母親の体験を聞く機会をつくる 母親同士のつながりをつくる
他職種との連携を強化して連携をとりチームで関わる	子どもの親方や関わりをスタッフで共通認識をする 他職種の専門とする側面を支援はその職種に依頼する

遊びの教室における保健師の支援技術

山田 貴代 講師
博士(保健学)

Takayo Yamada

✉ takayo.yamada@komatsu-u.ac.jp

研究
Keyword

母性看護、助産師教育、産後ケア、診療報酬明細書(レセプト)分析

プロフィール

2004年 静岡県立大学 大学院看護学研究科 修士課程 修了
2007年 静岡県立大学 看護学部 助教
2018年 金沢大学 医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士後期課程 修了
2020年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 講師

研究分野

母性看護学、助産学、医療社会学

所属学会

日本助産学会、日本医療・病院管理学会、日本看護科学学会、日本看護教育学会、静岡母性衛生学会

妊婦健康診査実習を
ルーブリックで学びやすく

専門分野・研究分野

妊婦健康診査の実践能力に関する研究

日本の助産師教育の実習の中心は、分娩介助でした。そのため、妊婦健康診査の実践能力に関する研究は多くありませんでした。しかし、産科医師の減少に対するサポート体制として、産科医師と助産師の業務の役割分担が必要とされるようになり、助産師には、分娩介助だけでなく、ローリスク妊婦への妊婦健康診査の実践能力も求められています。そのため、助産師が卒業する際に求められる妊娠期のケアは高い到達度が求められています。そこで、妊婦健康診査実習での学生の学びや自己評価、評価方法についての研究を行っています。

また、診療報酬明細書(レセプト)の分析により、地域での受診状況に関する研究も行っています。

研究内容

ルーブリック評価表を用いた妊婦健診実習の評価

妊婦健康診査の実践能力の向上のため、実習での評価が重要であると考えました。そこで、まず実習記録についてルーブリック評価表を開発しました。ルーブリックは「子どもの学習成果を評価するための一セットの得点化指標である」とされています。ルーブリックを用いることにより、タイミングの良いフィードバック、学生による詳細なフィードバックの活用、平等な学習環境づくりが得られるとされています。従来の評価表との比較で評価者間の評価の差異が小さいという示唆も得られました。そして、妊婦健康診査実習に導入し、学生から「自分の課題がわかりやすかった」という評価が得られました。ルーブリック評価表を妊婦健康診査の技術、母性看護学実習で作成してこうと考えています。

シーズ・地域連携テーマ例

- 妊婦健康診査の実践能力
- 母性看護教育についてのルーブリック開発
- 診療報酬明細書データ分析による受診状況分析

論文

- Inter-Evaluator Consistency in Evaluation of Midwifery Students' Records in Clinical Practice for Antenatal Health Check-ups: Effectiveness of a Developed Rubric, Yamada T et al., Journal of Wellness and Health Care, 41(1), p.71~p.85, 2018
- 大学院教育と学部教育の妊婦健康診査実習前後の助産実践能力に対する自己評価の比較, 山田貴代, 松岡恵, 西川浩昭, Journal of Wellness and Health Care, 41(2), p.139~p.150, 2019
- 子育て世代包括支援センターの現状と課題, 高木静, 東野定律, 山田貴代, 経営情報イノベーション研究, 第8巻, p.1~p.10

講演・口頭発表等

- 産後早期から1ヵ月にかけてのエジンバラ産後うつ評価表(EPDS)の変化と関連要因, 高木静, 山田貴代, 田村圭浩, 鈴木公基, 第61回日本母性衛生学会, 2020年
- 母性看護学分野における分娩期看護のシミュレーション教育の実践評価, 山田貴代, 坂本めぐみ, 久司瑠璃子, 第62回日本母性衛生学会, 2021年
- 産後ケア事業の利用状況と課題~第1報 I 県における利用の実態~, 山田貴代, 坂本めぐみ, 久司留理子, 第64回日本母性衛生学会, 2023年
- 産後ケア事業の利用状況と課題~第2報 産後ケア事業の担当者がとらえる課題~, 山田貴代, 坂本めぐみ, 久司留理子, 第64回日本母性衛生学会, 2023年

競争的資金等の研究課題

- 成人教育に基づく助産師の妊婦健診・ケア能力形成プログラムの検討, 科学研究費補助金(基盤研究C) 2010年~2012年
- 外国人患者と医療者間におけるコミュニケーション・ギャップの実証研究, 科学研究費補助金(基盤研究C) 2009年~2011年

表 妊婦健康診査実習のルーブリック(一部抜粋)

健診の要素	A(3点)	B(2点)	C(1点)	D(0点)
受診目的にそった診察の要点	妊婦の受診目的と妊娠週数に応じた診察内容と適切な診察方法が できている	妊婦の受診目的と妊娠週数に応じた診察内容と診察方法に 一部不足があるが、かなりできている	妊婦の受診目的と妊娠週数に応じた診察内容と診察方法の選択に、 かなり不足がある	妊婦の受診目的と妊娠週数に応じた診察内容と診察方法を 理解していない
妊娠週数にあった適切な情報収集	妊娠週数にあった必要かつ重要な情報が系統的に 十分に 収集できており、優先度、緊急度によって よく選択・整理されている	妊娠週数にあった必要かつ重要な情報が系統的に ほぼ 収集できており、優先度、緊急度によって ほぼ選択・整理されている	妊娠週数にあった必要かつ重要な情報収集に 不足があり 、優先度、緊急度の 情報収集が整理されていない	妊娠週数にあった必要な情報の選択、収集が されていない
妊婦からの情報収集(コミュニケーションスキル)	妊婦からのS情報は今後の経過予測に影響する 生活情報も十分に 引出せており、 妊婦の個性がアセスメントやケアに活かせる情報が収集できている	妊婦からのS情報は現在の状態の アセスメントに活かせる程度に 聴けており、 一般的なアセスメントやケアに活かせる情報が収集できている	妊婦からのS情報はアセスメントやケアに活かせる 情報が収集不足している	妊婦のS情報が まったく不足しており、基本的なS情報の収集に対する課題がかなり大きい

久司 留理子 助教

Ruriko kyuuji

修士(保健学)

✉ ruriko.kyuuji@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

妊産婦、新生児、社会的ハイリスク、看護教育

プロフィール

1996年 公立松任石川中央病院 助産師
2008年 こまつ看護学校 専任教員
2019年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士前期課程 修了
2022年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教
2024年 公立小松大学 大学院サステナブルシステム科学研究科 ヘルスケアシステム科学専攻 博士後期課程 在学中

研究分野

母性看護 / 看護教育

所属学会

日本助産学会、日本母性衛生学会、日本助産師会、日本看護シミュレーションラーニング学会、
日本看護学教育学会、日本看護科学学会、看護実践学会

専門分野・研究分野

妊産婦と子ども、家族を社会全体で支援するシステム作り

少子化の現代社会において生まれてくる子どもは貴重な宝であり、母には一生の中で数回しかない妊娠、分娩、産褥期を楽しく過ごしてほしいと考えます。しかし、核家族化や希薄な人間関係等母子と家族を取り巻く環境は決して優しくはありません。大切な子どもと家族を社会全体で支えていく為に、今子どもと家族を取り巻く環境はどのようになっているのか、必要な支援は何か、支援の為に何が必要かを明らかにして支援を実践していきたいと考えています。

又、看護学生が学生生活に於いて困難や悩みを抱えていないか、いち早く気付いて支援に繋げる仕組みについて研究しています。

研究内容

社会的ハイリスク妊婦の発見と支援を促すシステムの構築

近年の母子保健を取り巻く課題の中で、児童虐待と妊婦の自殺は重大な社会問題です。妊婦の中でも特定妊婦とその予備軍である社会的ハイリスク妊婦を早期に発見し支援に繋げる事でこれらの悲惨な状況を少なく出来るのではないかと考えます。その為には専門職だけでなく一般の人が地域で妊婦と子どもを見守るシステムが構築されることで多くの妊婦と子どもの支援に繋がると考え研究を進めています。

	妊産婦・保護者の状態像の例	関わりの視点	支援内容
一般層	様々な悩みや不安、戸惑いを感じながらも育児を行うことができる層 ➢ 子どもを可愛いと思うが、疲労・病気や夜泣きなどで時には育児負担を感じる ➢ 子どもの発達が遅いのではないかと感じ、不安になる ➢ 自分の時間が持てない、たまには子どもから離れたと思う 等	育てる力(セルフケア能力)の維持・向上 問題の発生予防	母子保健・子育て支援、 交流の場に関する情報提供、相談対応
中間層	より密な状況把握と支援・関係者のマネジメントを必要とする層 ➢ 子育てに対して否定的になっている ➢ 子どもを可愛がる気持ちが解らない ➢ 貧困や離婚など家庭環境の問題で子どもに関われない ➢ 非常に強い育児不安がある ➢ 障害や育てにくさを感じる子どもがいる ➢ 母親に精神疾患がある ➢ 母親・保護者に被害歴がある 等	早期発見・早期対応	母子保健・子育て支援、 交流の場に関する情報提供・マネジメント、相談対応(＋経済的な支援) 等 市区町村子ども家庭総合支援拠点等の関係機関による、より密な状況の把握
要介入支援層	虐待対応や予防に向けてより積極的・専門的な支援・介入、見守りを必要とする層 ➢ 若年妊婦、予期せぬ妊娠である ➢ 家庭内でDVが起きている ➢ 子どもを虐待している ➢ 育児放棄をしている 等	子どもの安全確保・ 治療・再発予防	要保護児童対策地域協議会、市区町村子ども家庭総合支援拠点、児童相談所への連絡調整 等

図1. 妊産婦・保護者の状態像別に見た関わりの視点と支援内容の例
出典:厚生労働省 子育て世代包括支援センター業務ガイドライン

妊産婦と子ども、家族の幸せ
のお手伝い

シーズ・地域連携テーマ例

- 地域での母子見守りシステム
- 行政、医療機関、研究機関協働による母子の支援
- 社会的ハイリスク妊婦を認識するシステム

論文

- 第1子妊娠時に離職した妊婦の思いに関する研究、久司留理子、日本母性衛生学会学誌、64 (4) 714-721.2024
- 看護専門学校生に対する“支援ツール”を用いた学校生活支援の実践報告、片山美穂、鈴木由依子、北岡和代、矢口和美、前田朱美、津田裕子、久司留理子、看護実践学会誌、34 (1)、97-105、2022. 3

講演・口頭発表等

- 令和6年能登半島地震における、避難所での運動支援の実践報告、久司留理子、竹井早葉子、山本保、岡部真美、第43回日本臨床運動療法学会学術集会、2024.9
- 社会的ハイリスク妊婦を支援する専門職者の認識の特徴、久司留理子、第7回日本産前産後ケア子育て支援学会、2023. 10
- 社会的ハイリスク妊婦を支援する、助産師と保育士の認識、久司留理子、坂本めぐみ、山田貴代、第63回日本母性衛生学会学術集会、2022. 9
- 第1子妊娠時に離職した妊婦の思いに関する研究、久司留理子、田淵紀子、第61回日本母性衛生学会学術集会、2020. 10
- 学生支援ツール「自己コンディション表」の効果(その2)-学生を対象とした面接調査から-、片山美穂、鈴木由依子、前田朱美、久司留理子、矢口和美、津山玲奈、日本看護科学学会第39回学術集会、2019. 11
- 看護師養成所における異学年交流活動を通しての教育効果、矢口和美、久司留理子、大井干都世、前田朱美、片山美穂、津田裕子、津山玲奈、鈴木由依子、飛田敦子、看護実践学会、第13回学術集会、2019. 9

競争的資金等の研究課題

- 一般の人が地域で妊婦と子どもを見守る、地域母子見守りシステムの構築、科学研究費助成事業(基盤研究C) 2021-2024

社会貢献活動

- 令和6年能登半島地震 仮設住宅での運動支援ボランティア



図2. 令和6年能登半島地震雨泥出しボランティア、仮設住宅での運動支援

矢口 和美 助教

博士(保健学)

Kazumi Yaguchi

✉ kazumi.yaguchi@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

高齢者、家族介護者、介護職員、介護ロボット

プロフィール

2012年 一般財団法人 こまつ看護学校 専任教員
2019年 福井県立大学大学院 看護福祉学研究所 看護学専攻 博士前期課程修了
2020年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助手
2022年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教
2023年 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士後期課程修了

研究分野

高齢者看護 / 地域看護 / 在宅看護 / 介護ロボット

所属協会

日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本看護実践学会、日本在宅ケア学会、
日本看護学教育学会、日本うんこ文化学会、日本エンドオブライフケア学会

専門分野・研究分野

地域で暮らす高齢者・家族介護者(介護職員)の支援と 介護ロボットの有用性に関する研究

これまで看護職として、また家族の一員として、看護・介護に携わってきました。「要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続ける」ことを支援する中、多くの喜びや幸せを実感するとともに、大変さや困難さにも直面してきました。要介護状態になっても地域で自分らしく暮らすことは当たり前のように思えますが、決して容易ではありません。

高齢者人口の増加に伴い、要介護高齢者も増加の一途を辿っています。一方、介護人材の高齢化は進み、2025年には約38万人の介護人材が不足するといわれ、介護の需要と供給の不均衡が浮き彫りとなっています。このような現状において、高齢者や介護に携わる家族双方が「地域で自分らしく暮らす」ことができるよう支援していくことは課題です。

地域で介護を受けながらも自分らしく暮らしたいと願う人々、自分なりの介護と生活を継続したいと願う人々、また介護に携わる専門職として高齢者を支えたいと願う人々、その願いを実現するためのシステムづくりやテクノロジーを用いた介護機器による支援に関する研究に取り組んでいます。

研究内容

高齢者における介護ロボットの活用

近年、高齢者の自立支援や介護者の負担軽減を目的に、介護ロボットの開発・実用化の取り組みが推進されています。これまで介護老人福祉施設の介護職員と管理者を対象に、介護ロボットの管理・活用実態、介護ロボット活用による介護職員の介護観への影響、介護職員と管理者の介護ロボット有用性の認識の違い、介護ロボットの課題などを明らかにしてきました。

介護職員の介護観への影響については、先行研究において「介護は人の手で」という考え方や「介護ロボットに仕事をとって代わられる懸念」等が報告されています。しかし、我々の研究では「高齢者のプライバシーや尊厳が損なわれないよう介護ロボットを活用することができれば、介護職員の介護観にポジティブな影響を与える」ことが明らかとなりました。高齢者の人権と生活の質を守るため尊厳を守ることは、専門職としての誇りややりがいを持ち働くことにつながると考えます。

そのためには、介護ロボットを安全・安心かつ倫理的に活用するための教育体制の整備や支援体制の整備について取り組むことが重要と考えます。

最後に、あなたが介護を受ける側の立場なら…

介護ロボットに24時間見守りをされることは「安心」?それとも「拘束」ですか?

介護ロボットとのコミュニケーションは「楽しみ」?それとも「淋しい」ですか?



シーズ・地域連携テーマ例

- 在宅療養を継続する高齢者と家族介護者の支援
- 高齢者における介護ロボットの活用

論文

- Impact of care robots on caregiving values of nursing home care workers: A cross-sectional study, Yaguchi K, Kato M, Journal of Wellness and Health Care, 48(1), 19-28, 2024
- 高齢者における介護ロボットの活用ー介護に携わる職員の認識に焦点をあてた文献検討ー, 矢口和美, 加藤真由美, 看護実践学会誌, 34 (1), 52-62, 2022
- 看護専門学校生に対する“支援ツール”を用いた学校生活支援の実践報告, 片山美穂, 鈴木由依子, 北岡和代, 矢口和美, 前田朱美, 津田裕子, 久留留子, 看護実践学会誌, 34 (1), 97-105, 2022

書籍等出版物

- 地域・在宅看護論Ⅱ支援論 暮らしの場における多様な支援を考える 改訂第3版, 南江堂(「4. 移動・活動と休息の支援」章 担当)

講演・口頭発表等

- Near misses of home health nurses involved transportation to clients' home visits, Arita M, Nakano J, Yaguchi K, 28th EAFONS 2025, 2025, 2
- 臨地実習指導者と大学教員が共通認識する看護実習生の責任ある行動の構造, 有田弥棋子, 加藤真由美, 矢口和美, 日本看護科学学会第44回学術集会, 2024, 12
- 過去10年の看護学生の死生観に関する研究の動向, 矢口和美, 彦聖美, 日本エンドオブライフケア学会第7回学術集会, 2024, 10
- 認知症者を介護する男性の死生観に関連する一考察, 彦聖美, 曾根志穂, 矢口和美, 日本エンドオブライフケア学会第7回学術集会, 2024, 10
- 特別養護老人ホーム介護職員の介護ロボットへの認識と介護観, 矢口和美, 加藤真由美, 有田弥棋子, 日本医療情報学会看護学大会第25回, 2024, 8
- 特別養護老人ホーム職員の介護ロボット活用における介護観への影響, 矢口和美, 加藤真由美, 日本看護科学学会第43回学術集会, 2023, 12
- A市生活者の排便状況に関する実態調査: 排便状況と困りごと, 徳田真由美, 矢口和美, 清水由香里, 榎原千秋, 角地孝洋, 日本うんこ文化学会第3回学術集会, 2023, 12
- 臨床指導者と大学教員が認識する臨地実習における看護学生の責任ある行動: 動詞焦点化の計量テキスト分析, 有田弥棋子, 矢口和美, 日本看護学教育学会第33回学術集会, 2023, 8
- Usefulness of Care Robots in Nursing Homes JAPAN: Comparison of Perceptions of Managers and Care Workers, Yaguchi K, Kato M, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, 6
- MANAGEMENT AND ACCIDENTS RELATED TO CARE ROBOTS IN JAPAN: A CROSS-SECTIONAL SURVEY OF NURSING HOME MANAGERS, Yaguchi K, Kato M, 26th EAFONS 2023, 2023, 3
- 特別養護老人ホーム職員の介護ロボットの活用状況に関する認識と関連要因, 矢口和美, 加藤真由美, 日本看護科学学会第42回学術集会, 2022, 12
- ISSUES IN THE UTILIZATION OF CARE ROBOTS RECOGNIZED BY THE MANAGERS OF NURSING HOMES, Yaguchi K, Kato M, 25th EAFONS 2022, 2022, 4

社会貢献活動

- 小松市介護認定審査委員 (2023年度-2024年度)

中田 明恵 教授

博士(保健学)

Akie Nakada

✉ akie.nakada@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

事業評価、生活習慣病予防、精神的健康、睡眠、要支援高齢者

プロフィール

2008年 金沢大学 医薬保健研究域 保健学系 看護科学領域 助教
2015年 金沢大学大学院 医学系研究科保健学専攻 博士後期課程 修了
2021年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 准教授
2022年 公立小松大学保健医療学部看護学科 教授

研究分野

公衆衛生看護学 / 地域看護学

所属学協会

日本公衆衛生学会、北陸公衆衛生学会、日本公衆衛生看護学会、日本産業衛生学会



保健師の「困った」や地域の健康を共に考えたい！

専門分野・研究分野

研究を通して地域全体の健康の底上げにつながる活動を

公衆衛生看護は地域に住むすべての方を看護の対象とします。地域には様々な健康レベルの方が住まい、その生活背景や価値観も多様です。人口減少が進む中、持続可能な社会を作っていくためには人々が健康に過ごせる期間を長く保っていきることが必要です。住民お一人お一人が状況・状態に合わせたセルフケアを行えるようになることや自ずと健康に過ごせる環境整備等のために、個人・集団を対象としたよりよい支援・活動の方法と評価について、保健師や地域保健に関わる関係者の方とともに考え、研究を通して、地域全体の健康の底上げにつながる活動を行いたいと考えています。また、将来の健康な地域を目指し、自身で健康管理を行う力をつけた若者を増やしていくため、若い世代に対し自分の身体を観察する力、セルフケアを行う力を楽しく学んで身につける機会を提供し、人生の土台となる「健康」を自ら作っていける人を増やす活動も考えています。

現在、本学において、アクティブラーニングの手法を用いた演習を行っています。アクティブラーニングは従来の講義型の学習ではなく、学生が能動的に授業時間内に(時間外にも)活動を行う中で学びを深める手法で、非常に有用な手法と考えています。そしてこの手法は大学教育だけでなく、地域における健康教育などのさまざまな場面に応用可能なものと考えます。大学での教育活動の実践を地域にも拡大・応用し、保健師をはじめとする地域の健康を守る専門職や関係者の皆さまの活動の応援ができればと思っています。

研究内容

対象者個々の観察研究から保健事業の評価 地域の健康データを用いた研究まで

【観察研究】

要支援高齢者の照度と精神的な健康の関係

【保健事業や支援活動の評価】

赤ちゃんふれあい体験学習事業の評価 / 就学サポート相談会事業の評価(写真1)

【地域の健康データを用いた研究】

健診データによる地区の健康状態の見える化 - 行政と大学の協働による成果 - (写真2)

【アクティブラーニングを用いた教育活動に関する研究】

臨床実習導入教育におけるPBL / ポスターツアーを用いたアクティブラーニングの取り組みの検討



写真1 白山市発達相談センターと協働し学会にて発表

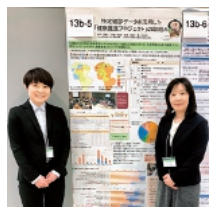


写真2 小松市いきいき健康課と協働し学会にて発表

シーズ・地域連携テーマ例

- 保健事業の評価
- 健康関連データの分析とアセスメント
- アクティブラーニングを活用した教育、教育効果

論文

- Illuminance, Subjective Sleep Quality, and Psychosomatic Health in Elderly Individuals Requiring Care: A Survey of Japan's Hokuriku Region in Winter, Akie Ichimori, Keiko Tsukasaki, et al, JOURNAL OF COMMUNITY HEALTH NURSING, 32 (2), 104-114, 2015
- Measuring illuminance and investigating methods for its quantification among elderly people living at home in Japan to study the relationship between illuminance and physical and mental health, Akie Ichimori, Keiko Tsukasaki, et al, GERIATRICS & GERONTOLOGY INTERNATIONAL, 13 (3), 798-806, 2013

講演・口頭発表等

- アクティブラーニングによる地域診断演習における学生の学び, 中田明恵他, 第12回日本公衆衛生看護学会学術集会(北九州市小倉), 2024年1月
- 特定保健指導が高齢者の1年後の健診結果に与える影響: 回帰不連続デザインによる検討, 塚谷才弘, 中田明恵他, 第82回日本公衆衛生学会総会(筑波), 2023年10月
- Evaluation of University Support, Preparation, and Implementation in the Local Government's COVID-19 Mass Vaccination, Part One: Evaluation of Collaborator Briefing and Preparation in Universities, Akie Nakada, Ritsuko Aijo, et al, the 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (Taipei, Taiwan) 2022年10月
- 発達障害の疑いのある児とその母親が参加する遊びの教室における保健師の支援技術, 前田朱美, 中田明恵他, 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会(愛媛), 2020年1月

競争的資金等の研究課題

- 「非接触参加者交流型の地域における新たな腎機能低下予防教育プログラムの開発」科学研究費(基盤研究C), 研究代表者, 2022年度-
- 「プレママ世代の育児力向上を目指したヘルスリテラシーの育成」, 科学研究費助成金(若手研究B) 研究代表者, 2016-2018年度
- 「北陸地方の要支援高齢者における冬季の照度が睡眠、活動、心身の健康に及ぼす影響」, 科学研究費助成金(若手研究B) 研究代表者, 2011-2015年度
- 「要支援高齢者において一日の照度が睡眠・活動・心身の健康に及ぼす影響」, 科学研究費助成金(若手研究スタートアップ) 研究代表者, 2009-2010年度

社会貢献活動

- 小松市健康づくり推進協議会運営委員(2023年7月~)
- 小松市国民健康保険運営協議会委員(2022年7月~)
- 小松市新型コロナウイルスワクチン集団接種協力事業(公立小松大学看護学科) コアメンバー(2021年度)
- 小松市 地域の健康状態の見える化プロジェクト企画(2015-2018年度)

塚谷 才弘 助教 修士(保健学)

Toshihiro Tsukatani

✉ toshihiro.tsukatani@komatsu-u.ac.jp

研究 Keyword

ヘルスプロモーション 介護予防 疫学 褥瘡 データベース

プロフィール

2020年 東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻 修士課程 修了

2020年 大垣市民病院 看護師

2022年 公立小松大学 保健医療学部 看護学科 助教

研究分野

公衆衛生看護学 / 疫学

所属学協会

日本臨床疫学会、日本サルコペニア・フレイル学会、日本公衆衛生学会、日本公衆衛生看護学会、日本褥瘡学会



データと健康を結びつける

専門分野・研究分野

医療・保健データを利用したヘルスプロモーションへの取り組み

現在、日本の高齢化の急速な進行に伴い要支援・要介護高齢者が増加しており、高齢者本人のQOLの低下に加え、家族の負担の増大や医療・介護費の増加などが深刻な課題となっている。要介護状態への移行の要因として認知症、脳血管疾患、骨折・転倒などが挙げられ、地域で早期にアプローチし、要介護リスクを低減させることが重要である。

近年様々な医療データが整備・蓄積されてきており、リアルワールドデータの有効活用の重要性が高まっている。看護師として急性期病院で勤務していた経験から、疾患の一次予防や二次予防における個人の健康への意識や知識が重要であると感じ、疾患の予防や健康についての適切な情報提供や教育、疾患に対する個人の意識の改善が疾患の予防・予後に大きく寄与すると考え、地域の様々な保健・医療データの更なる有効活用ができるような研究を行いたいと考えている。

研究内容

リアルワールドデータを用いた地域高齢者の介護予防方法の検討

【因果推論を用いた地域高齢者に対する特定健診の効果の検証】

メタボリックシンドロームによる心血管疾患リスクの低減のために2008年より40～74歳の健康保険被保険者に対して特定健康診査（以下、特定健診）、特定保健指導が実施されている。高齢者においてメタボリックシンドロームは種々の疾患発症リスクを高めるだけでなく、疾患発症によりADLの低下やフレイルへ発展する可能性もあり、メタボリックシンドロームの進行を抑制することが重要である。しかし保健指導参加の有無には、健康への意識の違いや学歴など、健診受診者の様々な背景が関連している可能性があり、交絡やバイアス等への対処が必要である。そこで局所的な範囲で無作為割付の成立を仮定する準実験研究の手法に着目し、回帰不連続デザインを用いて単一自治体の高齢者における特定保健指導の影響を検討した。

【地域高齢者における過度の体重減少の要因の検討】

高齢者は退職による生活習慣の変化や、加齢による体脂肪の増加・骨格筋量の減少などの身体的な変化により、体重の推移が若年者と異なるとされる。また高齢者の体重減少は心血管疾患の死亡リスク上昇との関連が報告されており、過度の体重減少には注意を要する。そこで心血管疾患リスク（メタボリックシンドローム指標）に着目し、早期の体重減少リスク同定のため比較的若年の高齢者を対象として体重減少の要因を検討した。

シーズ・地域連携テーマ例

- 保健関連データの分析とアセスメント

受賞

- 2022年1月, Wound Healing Society, 2022 Anita Roberts Award

論文

- Polymorphism analysis of candidate risk genes for pressure injuries in older Japanese patients: A cross-sectional study at a long-term care hospital, Toshihiro Tsukatani, Takeo Minematsu, Misako Dai, Nao Tamai, Gojiro Nakagami, Junko Sugama, Chika Takada, Hiromi Sanada, *Wound Repair and Regeneration*, 29(5):741–751, 2021
- Risk scoring tool for forearm skin tears in Japanese older adults: A prospective cohort study, Takeo Minematsu, Misako Dai, Nao Tamai, Gojiro Nakagami, Tamae Urai, Ayano Nakai, Shiori Nitta, Yukie Kataoka, Weijie Kuang, Mao Kunimitsu, Toshihiro Tsukatani, Hajime Oyama, Tomohiro Yoshikawa, Chika Takada, Miyoko Kuwata, Hiromi Sanada, *Journal of Tissue Viability*, 30(2):155–160, 2021

講演・口頭発表等

- 地域高齢者における体重減少とメタボリックシンドローム指標との関連：単一自治体の特定健診データの分析、塚谷才弘、中田明恵、第12回日本公衆衛生看護学会学術集会、2024年1月
- アクティブラーニングによる地域診断演習における学生の学び、中田明恵、塚谷才弘、第12回日本公衆衛生看護学会学術集会、2024年1月
- 特定保健指導が高齢者の1年後の健診結果に与える影響：回帰不連続デザインによる検討、塚谷才弘、中田明恵、池田美智子、第82回日本公衆衛生学会総会、2023年11月
- 日本人高齢者における褥瘡リスク遺伝子の多型解析：長期療養型病院における横断研究、塚谷才弘他、第22回日本褥瘡学会学術集会、2020年9月

社会貢献活動

- 第5期 こまつ市民大学 講師（2023年2月）



図1. 因果推論の考え方をまとめた書籍[Causal Inference: What If]
URL: <https://www.hsph.harvard.edu/miguel-hernan/causal-inference-book/>